

YOSHIMUTA

# 吉牟田遺跡

県道都城野尻線(氏益工区)地方道路交付金事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

宮崎県埋蔵文化財センター

YOSHIMUTA

# 吉牟田遺跡

県道都城野尻線(氏益工区)地方道路交付金事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

## 序

このたび宮崎県教育委員会では、地方道路交付金事業に伴い、吉牟田遺跡の発掘調査を行いました。吉牟田遺跡が存在する西諸県郡高原町大字吉牟田は、宮崎県南西部の山間部にあたる霧島山系の麓にあり、近辺には、大小様々な遺跡が存在していることが知られています。本遺跡は、大淀川支流の炭床川沿いの舌状台地に立地しており、遺構・遺物が良好な状態で残っていました。そして、縄文時代後期から近世にかけて、長い間、先人の生活が営まれていたことが判明しました。特に、縄文時代後期～晩期にかけては、土器の文様や石器の石材などから広域にわたる人・もの・情報の交流の跡を窺い知ることができます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となれば幸いです。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた諸先生方、並びに地元住民の方々に心から感謝の意を表します。

平成19年3月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所長 清野勉

## 例　　言

- 1 本報告書は、県道都城野尻線（氏益工区）地方道路交付金事業に伴い、宮崎県教育委員会が実施した吉牟田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、宮崎県土木部都城土木事務所の依頼を受けた宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は、平成17年6月1日～平成17年8月12日まで行った。
- 4 現地での実測・写真撮影等の記録は甲斐貴充・柳田裕三・押川陽香（筑波大学）を行い、空中写真撮影は㈱藤田に、また、自然化学分析は㈱古環境研究所に委託した。
- 5 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・実測・トレース・写真撮影等は柳田が整理作業員・阿部敬（東京大学）の協力を得て行った。また、石器石材及び器種については藤本聰（宮崎県埋蔵文化財センター）に教示を得た。また、土器圧痕の選別及び同定については、山崎純男（福岡市教育委員会）の指導を得て、比佐陽一郎・片多雅樹（福岡市埋蔵文化財センター）・本山宏・溝辺真（宮崎県総合農業試験場）の協力のもと柳田が同定した。
- 6 本書で使用した第1図「遺跡位置図及び主な周辺遺跡分布図」は、国土地理院発行の1/50000図「野尻」、第2図・第3図「周辺地形図」は、高原町発行の1/5000図「高原8」を基に作成した。
- 7 土層断面図及び遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に掲っているが、数字等記載がないものはその限りでない。
- 8 本書で使用した方位は、座標北（座標第II系）及び磁北である。座標北を用いた場合には、G. N. 磁北はM. N. と表示している。レベルは海拔絶対高である。
- 9 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。  
SC…土坑 SE…溝状遺構 SH…ピット
- 10 本書で使用した石材略号は次のとおりである。  
Ch;チャート Chert Cc;玉髓 Chalcedony Gr;花崗岩 Granite Hr;ホルンフェルス Hornfels  
Mu;泥岩 Mudstone Ob;黒曜石 Obsidian Os;尾鈴山酸性岩類 Pu;軽石 Pumice  
Sa;砂岩 Sandstone San;サヌカイト Sanukite Sh;頁岩 Shale Tu;凝灰岩 Tuff  
Ob(n);日東産黒曜石 Ob(kw);桑ノ木津留産黒曜石 Ob(ks);勝岳産黒曜石
- 11 本書の執筆及び編集は、柳田が担当した。
- 12 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

# 本文目次

## 第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の立地及び環境	2
第4節 歴史的環境	2

## 第Ⅱ章 調査概要

第1節 調査の経過	6
第2節 日誌抄	6
第3節 基本層序	7

## 第Ⅲ章 調査の記録

第1節 縄文時代の遺構と遺物	10
第2節 弥生時代以降の遺構と遺物	57

## 第Ⅳ章 自然科学分析

第1節 フローテーション作業について	58
第2節 吉牟田遺跡の圧痕土器について	59
第3節 炭化種実の種実同定及び放射性炭素年代測定・土器付着物の蛍光X線分析について	63

第V章 まとめ	70
---------	----

## 挿図目次

第1図 吉牟田遺跡位置図及び主な周辺遺跡分布図	4
第2図 周辺地形図①	5
第3図 周辺地形図②	5
第4図 基本土層図	8
第5図 土層断面図	9
第6図 縄文時代の遺構分布図	10
第7図 縄文時代の遺構図	11
第8図 縄文時代の遺構図	12
第9図 縄文時代の遺構図	13
第10図 縄文時代の遺構図	14
第11図 縄文時代の遺構・遺物分布図	16
第12図 縄文土器分布図	17
第13図 縄文土器 実測図	22
第14図 縄文土器 実測図	23
第15図 縄文土器 実測図	24
第16図 縄文土器 実測図	25
第17図 縄文土器 実測図	26
第18図 縄文土器 実測図	27
第19図 縄文土器 実測図	28
第20図 縄文土器 実測図	29
第21図 縄文土器 実測図	30
第22図 縄文土器 実測図	31
第23図 縄文土器 実測図	32
第24図 縄文土器 実測図	33
第25図 縄文土器 実測図	34
第26図 縄文土器 実測図	35
第27図 縄文土器・円盤形土製品 実測図	36
第28図 石器 分布図	45
第29図 石器 実測図	46
第30図 石器 実測図	47
第31図 石器 実測図	48
第32図 石器 実測図	49
第33図 石器 実測図	50
第34図 石器 実測図	51
第35図 石器 実測図	52
第36図 石器 実測図	53
第37図 石器 実測図	54
第38図 IV層検出溝状遺構及び出土遺物実測図	56
第39図 弥生時代以降の遺物実測図	57
第40図 SC1埋土サンプリング箇所図	58
第41図 吉牟田遺跡出土縄文土器の編年組列	72

## 表目次

第1表 縄文土器観察表	37
第2表 縄文土器観察表	38
第3表 縄文土器観察表	39
第4表 縄文土器・円盤形土製品観察表	40
第5表 縄文土器計測表	40
第6表 石器観察表・石器計測表	55
第7表 フローテーション作業内容	58
第8表 庄痕土器探査の作業記録	59
第9表 庄痕土器観察表	60

## グラフ目次

グラフ1 石器・石材組成	50
グラフ2 粗製洞片石器の形態分析・重量	50

## 図版目次

図版1 吉牟田遺跡遠景・調査区全域	75
図版2 第Vb層遺物出土状況・第Vb層遺物出土状況・第VI層完掘状況・近世溝状遺構完掘状況・縄文時代溝状遺構完掘状況	76
図版3 出土土器	77
図版4 出土土器	78
図版5 出土土器	79
図版6 出土土器	80
図版7 出土石器	81
図版8 出土石器	82

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

宮崎県都城土木事務所道路課道路建設係では、平成13年度から地方道路交付金事業を進めていた。宮崎県教育庁文化財課では、同事業の都城野尻線（氏益工区）において対象地内に周知の遺跡が存在することを確認したため、平成17年4月に都城土木事務所道路課と文化財課で、その取扱いについて協議し、4月18日から19日で試掘調査を行い遺跡の状況を確認した。その結果、縄文時代後期～晩期の遺物包含層と柱穴と考えられる痕跡を検出したことから、平成17年4月27日に文化財課と都城土木事務所と宮崎県埋蔵文化財センターの三者で再度遺跡の取扱いについて協議を行った。協議の結果、やむを得ず遺跡が影響を受ける事業対象地内の600m<sup>2</sup>について発掘調査を行い、記録保存の措置をとることになった。

発掘調査は、平成17年6月1日から平成17年8月12日にかけて、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。また、平成18年6月から11月にかけて遺物整理と報告書作成を埋蔵文化財センターにて行った。

## 第2節 調査組織

調査組織は次のとおりである。

### 発掘調査・整理作業（平成17年度）

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	宮園淳一
副所長兼調査第二課長	岩永哲夫
総務課長	宮越 尊
総務課主幹兼総務係長	石川恵史
調査第三係長	谷口武範
同係主任主事（調査担当）	甲斐貴充
同係主事（調査担当）	柳田裕三

### 整理作業（平成18年度）

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	清野 勉
副所長	加藤悟郎
副所長兼調査第二課長	岩永哲夫
総務課長	宮越 尊
主幹兼総務担当リーダー	高山正信
主幹兼調査第三担当リーダー	谷口武範
同担当主事（報告書担当）	柳田裕三

### 調査指導

福岡市教育委員会 文化財部長 山崎純男

### 第3節 遺跡の立地及び環境

西諸県郡高原町と都城市高崎町は、宮崎県南西部の霧島山系の麓に位置し、都城から宮崎市に向かって貰流し日向灘へと注ぐ大淀川の中流域にある。この地域には標高約200m前後の台地が展開し、その周辺を大淀川の支流にある岩瀬川・炭床川・高崎川等大小の河川が流れている。

本遺跡は、高原町と高崎町の町境にあたる西諸県郡高原町大字後川内字吉牟田4656-1番地に所在し、大淀川と岩瀬川の分岐地点にあたる岩瀬川右岸の台地上に存在する。この台地は、高尾山（標高約340m）から西側に向かって派生しており、火山灰により形成されたシラス台地である。また、この台地は、高原町内を東西に流れる炭床川によって浸食されており、複雑に入りくんだ地形が形成されている。この炭床川に向かっていくつもの舌状台地が南北にせり出しているが、本遺跡も同様に台地から南側に延びた標高162m～158mの舌状台地状に位置している。

また、巨視的に遺跡周辺の現在の環境をみると、南西に遠望できる韓国岳・新燃岳・夷守岳・高千穂峰をはじめとする多くの山々に囲まれており、その山合には水資源の豊富さを物語るように岩瀬ダムや轟ダムが構築されている。遺跡の周辺も水田が多く営まれており、炭床川まで約500m程度に位置する遺跡の状況からは、古くから水の確保も容易で人間の生活に適した立地状況であったと考えられる。

さらに、遺跡周辺に存在する霧島火山群から多種の火山灰が噴出しており、小地域的な火山灰層が重層的に堆積している。特に御池軽石（霧島御池）や高原スコリア（霧島大谷4～6テフラ）と銘々された火山灰は、周辺遺跡と比較する際の鍵層として注目される。

### 第4節 歴史的環境

地理的な遺跡の立地状況を踏まえ、本遺跡とリンクする時代について遺跡周辺地域にあたる西諸県郡高原町・都城市高崎町・高城町を中心に主な歴史的情景の足跡をたどることとする。

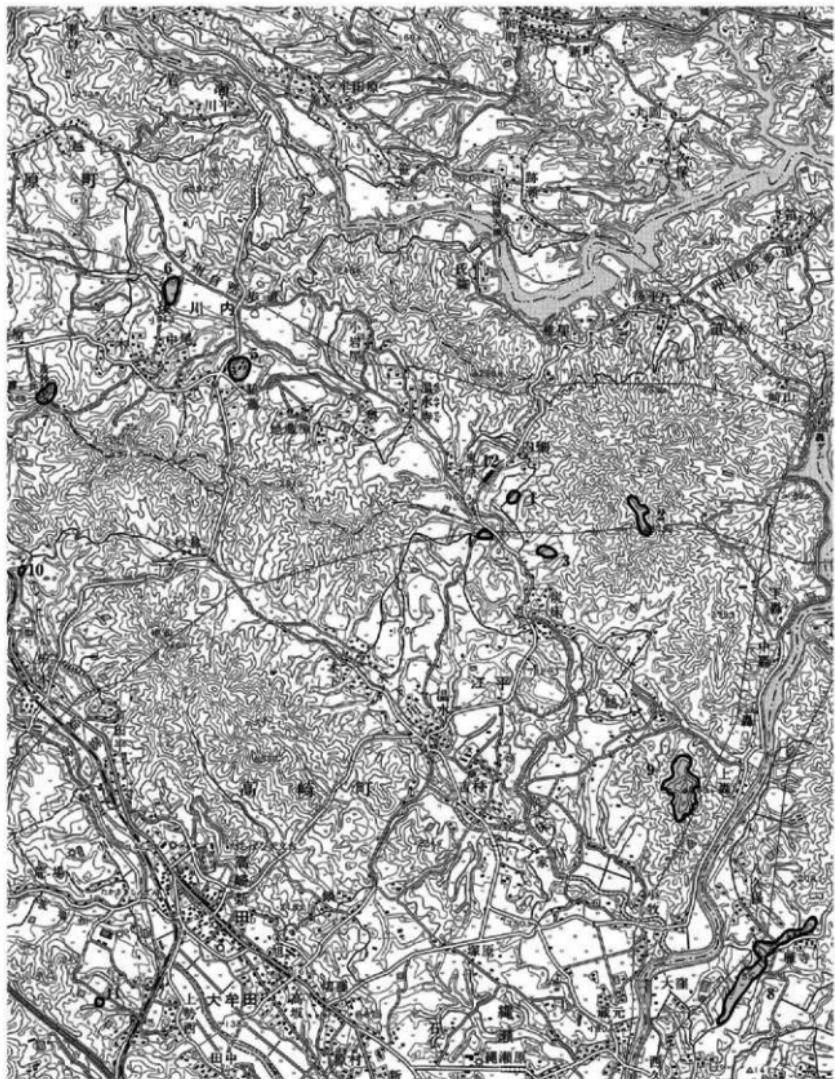
吉牟田遺跡周辺で確認されている遺跡は、高城町細井地区遺跡群や高原町楠粉山遺跡に代表されるようにその殆どが縄文時代後期に属している。細井地区遺跡群では、後期前葉～中葉を中心とする竪穴住居72軒、晚期を中心とする土坑が多数確認されている。住居内からは土器と共に磨製石斧・打製石斧などの生産性を示す道具や垂飾などの精神性を示す道具が出土している。本遺跡の周辺には高崎町柏ノ木遺跡の住居跡（指宿式期か）を除けば表採資料や包含層出土の遺跡が多く、この時期の宮崎県南西部の様相を考える上で重要な遺跡である。その他、同時期の遺跡として高原町大谷遺跡・佐土遺跡や高崎町権現ヶ宇都遺跡・北追遺跡が存在する。これらの遺跡うち大谷遺跡・佐土遺跡・権現ヶ宇土遺跡では、丸尾式土器を中心とした貝殻文系土器に、北久根山式土器や西平式土器といった磨消縄文系土器が付随する状況が確認されている。また、北追遺跡では後期後半の黒色磨研系土器や火山岩系の打製石斧が卓越している。これらの遺跡とは対照的に楠粉山遺跡では後期中葉の貝殻文系土器や磨消縄文系土器が少なく、綾式土器や宿毛式土器など後期前葉の土器が多く確認されている。後期以前の遺跡としては、高崎町砂子田遺跡（早期）、高原町川除遺跡・佐土遺跡・高城町城ヶ尾遺跡（前期）、荒迫遺跡（中期）が散見される。晩期以降、特に弥生時代に入ると遺跡数は激減してしまう。

古代から中世にかけては、島津庄真幸院あるいは三侯院に属する莊園が広がっていたと考えられ、生

産遺跡として宇津木遺跡や川除遺跡等で畠跡が確認されている。また、高城に代表されるように遺跡周辺は伊東氏と島津氏の激戦の地であり、文献資料や各地に戦績の跡が確認されている。本遺跡から南西方向に4kmほどのところに伊東義祐が族将伊東加賀守を配したとされる木場城があり、畠状空堀群の南限にあたることから中世においても重要な地域であったことが窺える。

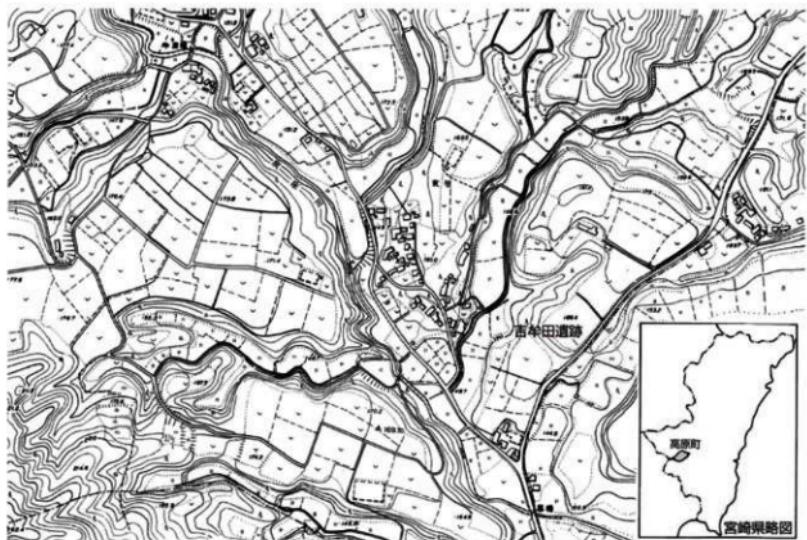
#### 【参考文献】

- 高崎町教育委員会 1990「様屋敷第1・2遺跡 木場城跡」『高崎町文化財調査報告書』第2集  
高崎町教育委員会 1993「朴木遺跡」『高崎町文化財調査報告書』第4集  
高崎町教育委員会 1993「高崎町の文化財」高崎町教育委員会  
高城町教育委員会 2004「細井地区遺跡群」『高城町文化財調査報告書』第14集  
高原町教育委員会 1991「立切地下式横穴墓群」『高原町文化財調査報告書』第1集  
高原町教育委員会 1999「大谷遺跡表採縄文土器資料」『高原町埋蔵文化財発掘調査報告書』第4集  
高原町教育委員会 1999「川除遺跡」『高原町文化財調査報告書』第5集  
高原町教育委員会 2000「楠粉山遺跡」『高原町文化財調査報告書』第6集  
高原町教育委員会 2003「楠粉山遺跡」『高原町文化財調査報告書』第10集  
高原町教育委員会 2004「宇津木遺跡」『高原町文化財調査報告書』第12集  
宮崎県教育委員会 1997「柏ノ木遺跡」「北迫遺跡」「宮崎県文化財調査報告書」第26集  
宮崎県教育委員会 1997「大谷遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第40集  
宮崎県埋蔵文化財センター 1998「荒追遺跡」『宮崎県埋蔵文化財発掘調査報告書』第11集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2001「本城原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財発掘調査報告書』第34集  
町田 洋 2003「新編 火山灰アトラス－日本列島とその周辺」東京大学出版  
八巻孝夫 1989「南九州の畠状空堀群の城」『中世城郭研究』3 中世城郭研究会  
横手浩二郎 1994「宮崎県西諸県郡高原町大谷遺跡表採の縄文土器」『南九州縄文通信』No.8



- 1 篠戸口遺跡(縄文・高崎)  
 2 すかし城跡(中世・高崎)  
 3 朴ノ木遺跡(縄文・高崎)  
 4 紗子田遺跡(縄文・高崎)  
 5 川除遺跡(古代・高原)  
 6 立切地下式横穴墓群(古墳・高原)  
 7 霊神社(高原)  
 8 細井地区遺跡群(縄文・高城)  
 9 木場城跡(中世・高城)  
 10 柏の木遺跡(縄文・高崎)  
 11 北迫遺跡(縄文・高崎)  
 12 吉牟田遺跡(縄文・高原)

第1図 遺跡位置図及び主な周辺遺跡分布図(1/50,000)



第2図 周辺地形図①(1/10,000)



第3図 周辺地形図②(1/2,500)

## 第Ⅱ章 調査概要

### 第1節 調査の経過

発掘調査は、平成17年4月に文化財課が行った試掘の結果を受けて、平成17年6月より埋蔵文化財センターが実施した。

調査はまず重機による表土の除去作業から着手した。調査区の北側から中央にかけてはⅡ層（耕作土層）を除去するとVb層が検出されたが、南側については、Ⅲ層（高原スコリア層）の堆積が部分的かつ不安定な状況で確認された。そこで、調査区南側はIV層上面まで重機による掘削を行い、その後、人力によるVb層上面までの掘削と精査による遺構検出作業を層位的に行った。その後、調査区全面がVb層に掘った段階で、再度Ⅴ層（鬼界アカホヤ火山灰層）までの掘削と精査による遺構検出作業を行った。

調査の結果、遺物包含層の状況については、最近まで畠地として利用されていたためⅢ層までは遺物がなく、第Ⅳ層において主に中近世の遺物が検出された。また、調査区の中央から南側にかけて南西に伸びる近世の溝状遺構を検出した。その後、Vb層からVI層にかけて掘り進めたところ調査区のほぼ全面に縄文後期～晚期の土器（貝殻文系や磨消縄文系）や石器（石鎚や砂岩性の剥片類）等約3000点を超える遺物を確認した。また、遺構についてはVa層で溝状遺構1条、Vi層で土坑3基、竪穴状遺構1基を検出した。その他、Vi層でピット群を多数検出した。狹隘な調査範囲ながらも二層に跨る縄文時代の遺構・遺物を多数確認したことは大きな成果であった。

### 第2節 日誌抄

#### 発掘調査日誌

平成17年 6月 1日	表土剥ぎ
~8日	
6月 8日	現場事務所設置
6月 9日	器材搬入
6月 10日	作業員雇用開始
6月 13日	包含層精査
6月 15日	IV層包含層掘削
6月 16日	近世の溝状遺構掘削
6月 17日	グリッド杭設置
6月 21日	V層包含層掘削
7月 4日	VI層包含層掘削
7月 15日	体験発掘・遺跡見学会 (後川内小学校6年生 7名)
7月 21日	航空撮影
8月 2日	現地説明会(参加者 22名)
8月 3日	Ⅴ層・Ⅵ層掘削 (トレチ調査)
8月 12日	現場終了・現場事務所撤収



【発掘調査作業風景】

## 整理作業日誌

平成17年 10月 水洗・注記  
平成18年 7月 接合・圧痕の探査  
7月20日 山崎純男氏（福岡市教育委員会）  
～22日 による調査指導  
7月25日 フローテーション作業  
26日 水洗選別作業  
31日 実測・拓本  
9月 8日 トレース  
10月20日 レイアウト



【現地説明会】

## 報告会(報道等の記録)

平成17年 7月15日 小学生体験学習（高原町広報・NHKニュース）  
8月 2日 現地説明会  
平成18年 7月30日 報告会「遺跡が語るひむかの歴史2006」  
（宮崎日日新聞）

宮崎日日新聞

2006年7月30日 朝刊



【宮崎日日新聞掲載記事】

## 第3節 基本層序

吉牟田遺跡の基本層序を第4図に示した。本遺跡の土層堆積は、必ずしも一定ではなく南北で異なる状況が看取された。一つに調査対象地区は、旧地形が北東から南西に向かって傾斜し、特に調査区中央から南西に向けてはその傾斜の度合いが強まっているため、南西側は北東側に比べ土層が厚く堆積していた。また、二つ目に本遺跡は最近まで里芋畑として営まれており、大部分が区画整備に伴い従来の土層が削平を受けていたため、特に北東側においては包含層（Vb層）の消失がみられ、耕作土層を除去すると第VI層が検出された。こうした地形等の諸条件により部分的に土層堆積に若干の相違が看取されるものの、基本土層としては次頁の土層堆積を呈していると捉えておきたい。

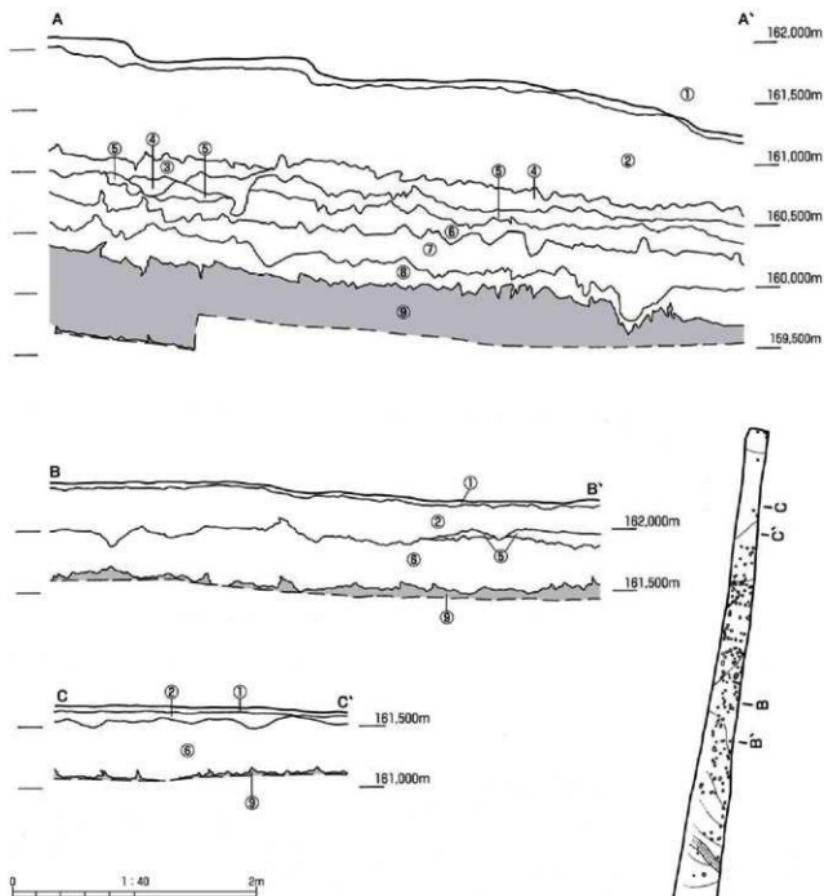
なお、本調査では、基本土層・V層から下位の堆積については、周辺工事の法面にて確認したものであり、発掘調査によって確認したものではない。これは、発掘調査が道路拡張に伴うもので第V層下位は法面施工の都合により調査面積を確保できなかったためである。

以下、基本層序について説明を行う。

I層	第 I 层：表土層。堆積が約 5 cm～10 cm である。軟質でしまりがない。
II層	第 II 层：褐灰色土層（耕作土層）。（Hue10YR4/1）堆積約 70 cm～80 cm。やや硬質で、しまりが強い。3 mm～5 mm 前後の白ボラを多く含む。
III層	第 III 层：明黄褐色土層（Hue2.5YR6/6）。部分的な堆積であり最大 5 cm 程度。1 cm～5 cm の塊状の豆石で高原スコリア（Kr-Th）と考えられるが、調査区の南側のみ部分的に確認できた。
IV層	第 IV 层：黒褐色土層（Hue10YR2/2）。縄文後期から中世の遺物包含層。部分的な堆積で、最大 10 cm 程度。
V層	第 Va 层：暗褐色土層（Hue10YR3/4 暗褐色土層）。縄文後期～晩期の遺物包含層。堆積 10 cm～30 cm。軟質でしまりがある。
	第 Vb 层：黒褐色土層（Hue10YR2/3）。縄文後期～晩期の遺物包含層。堆積 10 cm～20 cm。やや軟質でしまりがある。3 mm～5 mm 前後の明黄褐色の粗粒子（霧島御池火山灰：Kr-M 通称御池ボラ）を含む。
VI層	第 VI 层：黒色土層（Hue10YR2/1）。縄文後期～晩期の遺物包含層。堆積 10 cm～40 cm。やや軟質でしまりがある。3 mm～5 mm 前後の明黄褐色の粗粒子（Kr-M）を多量に含む。
VII層	第 VII 层：黄橙色土層（Hue10YR7/8）。堆積 20 cm～40 cm。硬質でしまりが強い。鬼界アカホヤ火山灰層（K-Ah）である。
VIII層	第 VIII 层：黒色土層（Hue10YR1.7/1）。堆積 10 cm～30 cm。やや硬質でしまりがある。3 mm～5 mm 前後の明黄褐色の粗粒子（K-Ah）を多量に含む。
IX層	第 IX 层：黒色土層（Hue10YR1.7/1）。堆積 30 cm～60 cm。やや硬質でしまりがある。3 mm～5 mm 前後の明黄褐色の粗粒子（K-Ah）を少量含む。
X層	第 X 层：暗褐色土層（Hue10YR3/3）。堆積 40 cm～60 cm。硬質でしまりがある。3 mm～5 mm 前後の明黄褐色の粗粒子（K-Ah）を微量に含む。
XI層	第 XI 层：黒褐色土層（Hue10YR2/3）。堆積 40 cm～50 cm。硬質でしまりがある。
XII層	第 XII 层：淡黄色土層（Hue2.5YR8/4）。堆積 40 cm 以上。粘質でしまりがある。上層部には多孔質の豆石を含む。姶良入戸火山灰層（シラス）である。

第4図 基本土層図

\*火成灰に関する同定については、科学的分析ではなく現地において調査担当者による経験的な同定によるものである。  
\*\*現在、高原スコリア（Kr-th: Oi-5-Oi-6 霧島大谷第5-第6テフラ（Oit-Group））の年代については、荒迫遺跡、大谷遺跡、袖ヶ浦山遺跡の調査・分析の成果から現在 11～13 世紀の年代が考えられている。



#### 【土層注記】

- ①褐色土…基本層序Ⅰ層。表土層。  
 ②褐灰色土…基本層序Ⅱ層。耕作土層。近世以前の  
 造土。白ボウが混じる。やや硬質でしまりがある。  
 ③黒褐色土…基本層序Ⅳ層。含有粘子  
 がなく、軟質でしまりがない。  
 ④暗褐色土…基本層序Ⅴa層。番島御池火山灰(Kr-M)が混  
 じる。軟質でしまりがある。  
 ⑤深褐色土…基本層序Ⅴb層。(Kr-M)が混じる。やや軟質でし  
 めりがある。  
 ⑥黑色土…基本層序Ⅵ層。(Kr-M)が多量に混じる。やや軟質でしまりがある。  
 ⑦深褐色土…基本層序Ⅵ層に近い。(Kr-M)が多量に混じる。やや軟質でしまりがある。  
 ⑧と比べてやや明るみある。調査区南側のみ発達。  
 ⑨褐色土…基本層序Ⅴ層とⅥ層の漸移層。  
 (Kr-M)が小量混じる。軟質でしまりがない。調査区南側のみ堆積。  
 ⑩明黄褐色土…基本  
 層序Ⅵ層。鬼界アカホヤ火山灰層(K-Ahr)である。

第5図 土層断面図

### 第Ⅲ章 調査の記録

#### 第1節 繩文時代の遺構と遺物

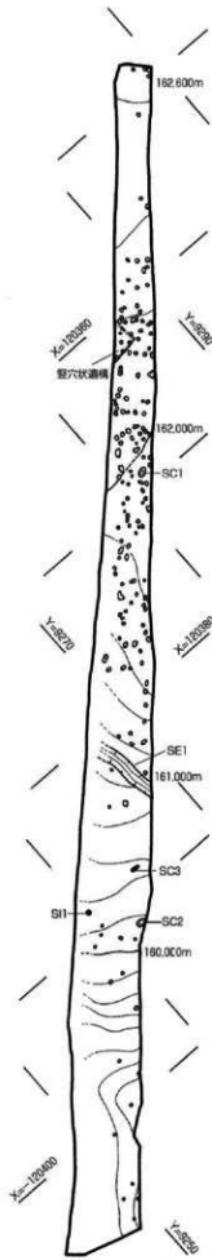
本遺跡で発見された縄文時代後期から晩期の遺構及び遺物は主にⅤa層からⅥ層中で検出されている。しかし、先に述べたように本遺跡の層位の状況は必ずしも良好とはいえない。この点を考慮しつつ、確認された遺構・遺物について説明を行う。

Ⅳ層では散発的に調査区南側で中世と近世の遺物に混じって縄文土器の細片等が確認された。対照的にⅤb層からⅥ層にかけては、多くの遺構・遺物が確認された。遺構は調査区中央から北側にかけて緩斜面に広がり、遺物は調査区中央から南側にかけて急傾斜の範囲に重層的に集中する分布的傾向が看取された。この現象は、遺物の時期幅が後期中葉から晩期前半にかけて存在することや先述の土層堆積の状況から緩斜面の範囲に営まれた遺跡からの継続的な流れ込みにより形成された可能性が高いと想定される(第11・12・28図)。

遺構は、Ⅴb層で溝状遺構1条、Ⅵ層で集石状遺構1基、Ⅶ層で土坑3基、竪穴状遺構1基を検出したほか調査区の中央付近を中心に主にⅧ層で柱穴群を検出した。さらに下層になるにつれて遺物集中区も調査区中央から南側に絞られてきた。

これらの遺物のうち、晩期については土器細片が散見されているのみで、主に貝殻文系土器を中心とする後期中葉の土器群とそれに付随する石器群がⅥ層で集中的に出土している(第5・6表)。遺構の帰属時期についてはⅤa層で検出された溝状遺構を除外するとⅧ層で確認された遺構が多く、「検出面=掘込面」ではないとしても概ね後期中葉から晩期前半の時期幅として捉えたい。

以上の結果を踏まえ、各遺構・遺物について詳細に説明をおこなう。



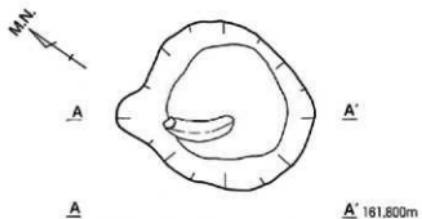
第6図 縄文時代の遺構分布図(1/250)

## 1 繩文時代の遺構

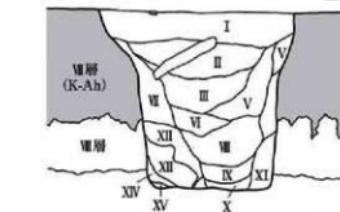
縄文時代の遺構は、土坑3基、溝状遺構1条、集石状遺構1基、竪穴状遺構1基を検出している。遺構は少数であるが、遺物の出土量と同一台地上に平坦面が広がる立地状況を勘案すると、周辺に集落が存在していた可能性は高いと推察し得る貴重な遺構である。

### 土坑 (SC 1～3)

V層で3基の土坑を確認した。SC 1は、平面プランが橢円形で長軸82cm、短軸64cm、深さ71.5cmの形態を呈している。断面形は、逆台形状で、遺構の中位に石皿の破片が直立からやや傾いた状況で検出されたほか、土坑上部で縄文土器片が出土した。



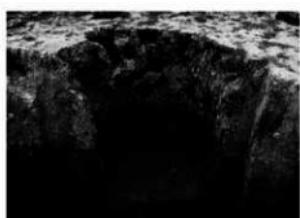
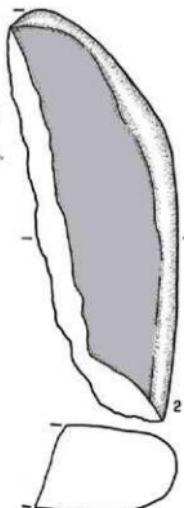
SC 1 半截状況



SC 1 堆積状況

- 地圖：現在している新字、土壁・その他の  
1 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。  
2 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。やや敷設してしまった。  
3 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。  
4 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。  
5 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。  
6 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。  
7 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。  
8 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。  
9 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。  
X 1 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。  
X 2 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。  
X 3 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。  
X 4 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。  
X 5 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。  
X 6 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。  
X 7 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。  
X 8 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。  
X 9 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。  
X 10 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。  
X 11 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。  
X 12 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。  
X 13 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。  
X 14 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。  
X 15 1973.2月 K-M-L-Ahの箇所に同じ。敷設してしまった。

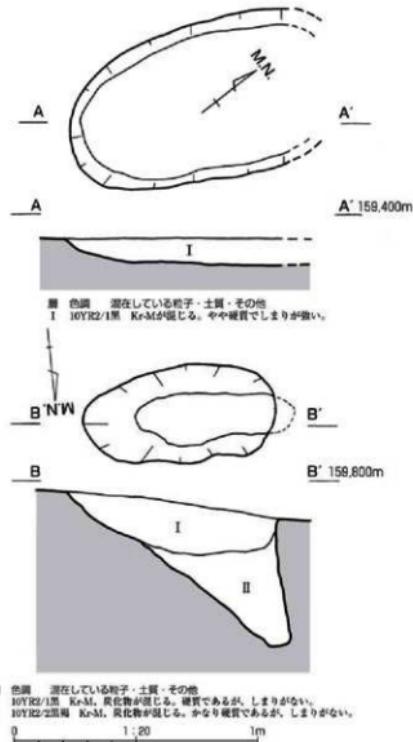
0 1:40 2m



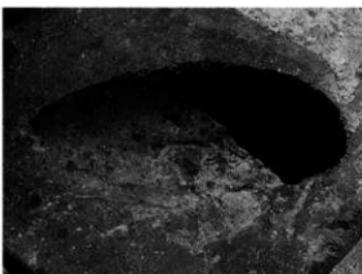
SC 1 完掘状況

0 1:3 10m

第7図 縄文時代の遺構図



SC 2 半掘状況



SC 3 完掘状況

第8図 繩文時代の遺構図

S C 2 は、平面プランが梢円形で長軸115cm、短軸64.2cm、深さ11.5cmの形態を呈している。土坑は、非常に浅く、床面は安定していなかった。土坑内から遺物は出土していない。

S C 3 は、平面プランが梢円形で長軸78.2cm、短軸40.5cm、深さ64.2cmの形態を呈している。床面に向かって上端から斜め方向に掘り込まれていた。土坑内から遺物は出土していない。

これらの土坑のうち、S C 1について形状及び出土遺物から機能的側面に関する陥し穴、土壤、貯蔵穴や廃棄土坑の可能性を推察して調査を行ったものの、結果としてその実態把握には及ばなかった。しかし、その調査過程を記述し、今後の評価に資するものとしたい。

先ず形態的特徴から陥し穴としての機能を推察した。形態的に類似する陥し穴が県内にも存在するが、深さ71cmと陥し穴にしては浅く、横方向からスライスしつつ床面を削ったが小穴は確認されなかった。次に、細長い石皿が斜方向に傾いた状況で出土していることから石皿を墓標的意味合いで意識的埋設した土壤としての機能、用途を推察した。しかし、埋土の堆積状況が自然堆積で人为的に埋設によるものではなかった。次に、出土した石皿が著しく研磨されており、その重量が3.5kgと重いことから周辺で食糧を加工したことは想像に難くなく貯蔵穴や廃棄土坑としての機能を推察した。そこで、床面直上の埋土のフローテーションを実施したが、炭化した木の芽と炭化材のみの検出しか得られなかった。以上、調査過程とその結果である。

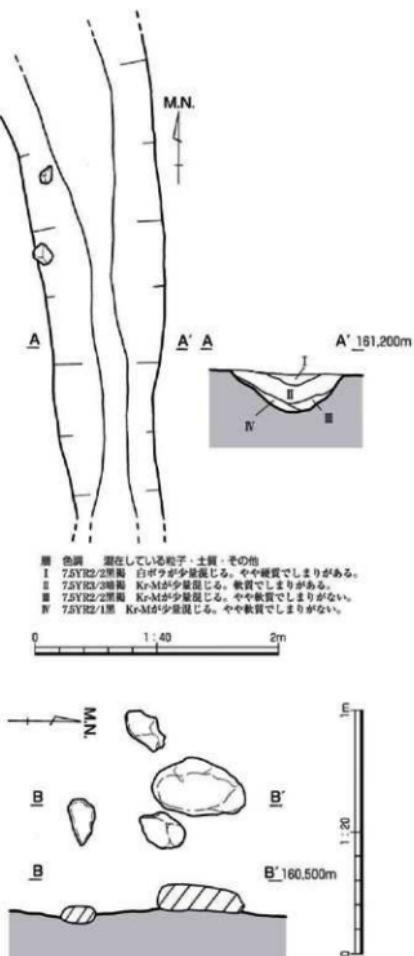
### 溝状遺構 (SE 1)

S E 1は、調査区内で遺構全体を検出していないので遺構の全体像は明確ではないが、V b層で検出した状況からは長さ390cm、幅90cm、深さ31cmの形状を呈していた。調査区外にあたる未確認部分の遺構の幅や深さについても概ねこの形状と大差のないものと想定される。断面形態は、台形状である。埋土の状況から掘り込み面は検出面より上層であることがわかる。さらに、埋土の殆どがVa層に由来する埋土であった(第9図第II層)。また、遺構内から縄文後期の土器碎片や礫が出土したことやVa層が縄文後期～晩期の包含層にあたることから、それらの時期に形成された遺構と想定される。また、軸方向がほぼ南北方向に形成されており、台地から沢筋の方向に向かって伸びていたと考えられる。土器片については、図化できないほどの遺存状況であった。胎土等の特徴から縄文後期に相当すると捉えられよう。

### 集石状遺構 (S I 1)

集石状遺構は、VI層で検出した。砂岩の礫4点のみであるが、半径20cmの円内に密集しており旧石器時代の礫群の認定と同一的観点からすると人為的意図のある石の集積の可能性もあるため、ここでは集石状遺構として取り扱う。また、4点の礫のうち、3点は完形で赤色を呈しており、被熱を受けたと捉えられる。ただし、被熱と考えられる理由として、石器で使用された砂岩の色調と比較した場合に極度に赤い点や石の表面が被熱を受けた石のようにバラバラと剥げる点という観察結果からである。

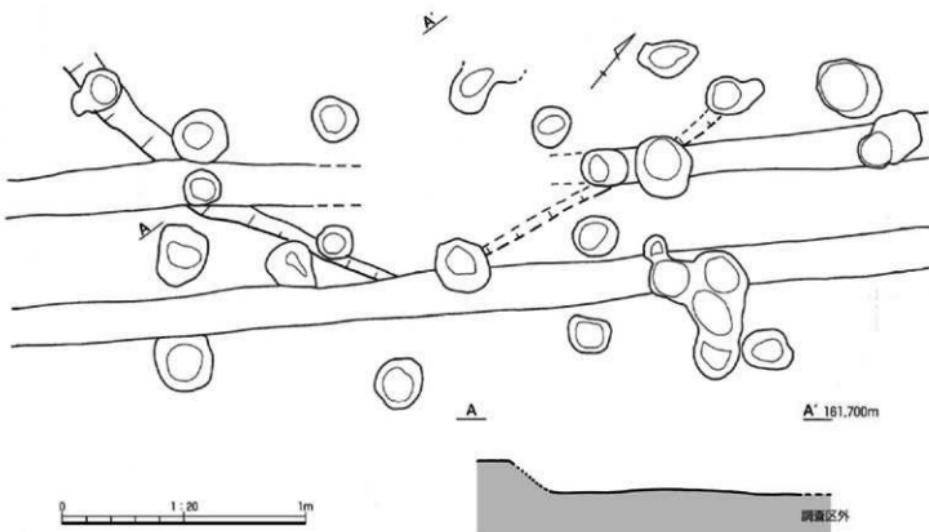
溝状遺構により消失された部分もあり、周辺に遺構が広がっていたと想定される。



第9図 縄文時代の遺構図



S I 1 検出状況



第10図 縄文時代の遺構図

#### 豎穴状遺構

豎穴状遺構は、長軸150cm以上、深さ約15cm~10cm前後である。残存する2辺の掘り込みラインから方形の平面プランの可能性が考えられる。しかし、以下の理由から住居跡とする積極的な根拠を見いだしえなかつた。一つは遺構内からの遺物が出土しなかつた点である。もう一つは、遺構に伴う柱穴が不明確であった点である。これは、遺構周辺が調査区北側にあたり後世の耕作による包含層の大部分の消失と遺構の遺残状況の悪さにより豎穴状遺構とピット群の埋土との識別ができなかつたためである。この他、周辺にトレンチャーが存在する点や工事による掘削範囲の制限も理由としてあげられる。

#### ピット群

Vb~VI層で数基を確認し、VII層で最も多く確認した。円形や方形の配列は見い出しえなかつた。これは、調査面積等の制約が第一の要因として考えられる。ただし、多くの小穴を検出したことから何らかの建築物が存在した可能性はある。埋土は殆どが重層することなく一つの埋土により形成されていた。色調により3種類程度に分類した。参考までに記しておく。(1:10YR3/3暗褐 2:10YR2/1 黒 3:10YR5/4/ぶい黄褐)

## 2 繩文時代の遺物

本遺跡では縄文時代後期から晩期にかけての遺物総数3,752点（土器3,502点・石器250点）が出土した。その他、レキも174点出土した。

調査では必ずしも層位の安定性は得られていなかった。そこで、重層的に出土した遺物について層位的上下関係を把握するため接合及び整理を行った。その結果、例えば時期認定に有用な土器型式を含む土器ではV<sub>a</sub>層～VI層にかけての接合事例（第17図51）が、剥片石器においてもV<sub>b</sub>層とVI層での接合事例（第33図271）が確認されるなど、遺物の上下移動は顕著にみられた（第5・6表）。

この状況では、遺物の層位的検討による層位時期認定について不確定な要素を払拭し難いと考えた。そこで、各種遺物の解説にあたっては、一定の分類基準に準じて行い項目毎に記述することとする。

### 1) 縄文土器について

本遺跡で出土した縄文土器についてこれまで研究された土器編年を基軸に分類作業を行った。形態的特徴により鉢形・深鉢形土器（第Ⅰ群）と台付皿形土器（第Ⅱ群）に大別し、文様・器形といった個々の属性の分類作業から鉢形・深鉢形土器を1類～12類に台付皿形土器を8類に細別した。分類された土器群について、以下説明を行う。

#### 第Ⅰ群 鉢形・深鉢形の土器

深鉢形土器を文様を中心に分類すると、貝殻文施文土器と縄文施文土器とその他に大別できる。貝殻文施文土器は市来式系土器を中心とした南九州の所謂貝殻文系土器群であり、縄文施文土器は北久根山式土器を中心とした北部九州系の所謂磨消縄文系土器群である。

貝殻文系土器群は、2類～5類がそれに相当し、磨消縄文系土器群は、7類～10類までがそれに相当する。ただ6類については両群の有文土器とは異なる無文土器群として分類する。

#### 1類（第13図3）

口縁部がやや外反し、外面に凹線文がみられる土器である。また、口唇頂部に凹圧がみられる。凹線をもつ土器片はこの1点のみの出土である。

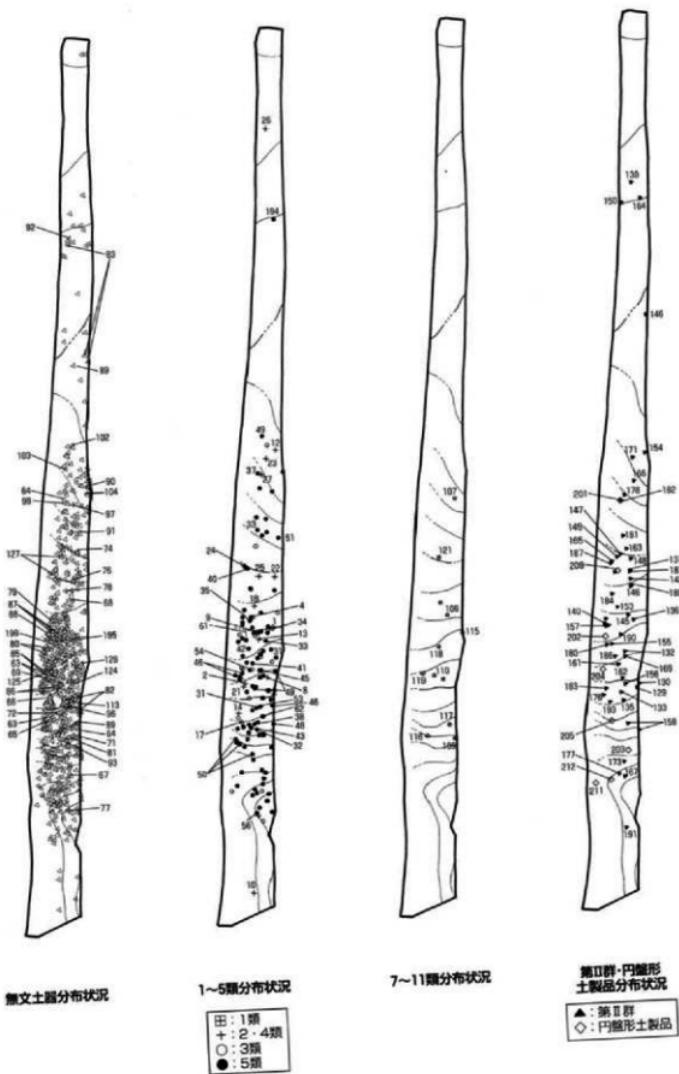
#### 2類（第13図4～17）

貝殻文を主体とする土器で、口縁部が肥厚し断面形が丸みのある三角形で、胴部はやや膨らみをもつ形態を呈する土器群である。施文部位は、口縁部の肥厚帯のみであり、文様構成は、貝殻腹縁刺突文を含む刺突文（4～10）、沈線文（11～17）である。整形の為の調整方法は、条痕か条痕後ナデである。

8は、他の土器と違い肥厚の度合いが強く列点状の刺突文も異質な感がある。また、17は、沈線文の形状が9～14に類似するが、肥厚帯がない。これらの土器については、個々の文様及び器形に相違があるものの大まかにみて類似性が認められるため敢えてこのカテゴリーに分類した。



第11図 縄文時代の遺構・遺物分布図(1/400)



第12図 繪文土器分布図(1/400)

### 3類（第13図 18・19）

貝殻文を主体とする土器で、口縁部はやや外反し、縦方向の瘤状突起が口縁部に装飾される土器である。文様構成は、刺突文、沈線文である。整形の為の調整方法は、条痕か条痕後ナデである。小片であるため全体像は想定しがたいが、貝殻文系土器の中でも2類・4類の土器群とは異なる土器として捉えたい。

### 4類（第14図 20～31）

貝殻文を主体とする土器で、口縁部が肥厚し断面形が三角形の形態を呈する土器群である。施文部位は、口縁部から肥厚帯にかけてあり、文様構成は、貝殻復腹刺突文、横または斜方向の沈線文である。また、整形の為の調整方法は、条痕か条痕後ナデである。沈線文には起点、終点の見られるものもある。

口縁部形態については、肥厚の形態また屈曲の度合いにより20と21～30と31の3種に分類でき、文様構成も刺突文や沈線文を単体で施文するものと貝殻腹縁刺突文の間に沈線文を施す複合的な施文をするものがあり、肥厚部位が下がるにつれて文様意匠が複雑化している。

### 5類（第14～17図 32～64）

貝殻文を主体とする土器で、口縁部から頸部の断面形が「く」の字状に屈曲するか外反する形態を呈する土器群である。また、口縁部形態は山形の波状口縁あるいは平口縁のものに分かれる。施文部位は、口縁上部から屈曲周辺にかけてあり、文様構成は、貝殻腹縁刺突文、竹管状刺突文、沈線文である。また、整形の為の調整方法は、条痕か条痕後ナデである。また、文様意匠及び形態によりA～C類の3種に細分する。

A類（32～43）…貝殻腹縁刺突文の間に沈線文を施す一群である。4類に比べ肥厚部位が口縁部より大きく下がり、口縁部から頸部の断面形は「く」の字状に屈曲する。波状口縁が多く、平口縁は34・35・38のみである。

B類（44～57）…連続する貝殻腹縁刺突文を施す一群である。口縁部から頸部の断面形は「く」の字状に屈曲するもの（44～47・49～52）と外反するもの（48・53～57）がある。また、波状口縁（44～49）と平口縁（52～57）の二つがある。また、貝殻腹縁刺突文も刺突列により2段（42～50）と1段（51～57）に細分される。

C類（58～64）…A類・B類以外の文様意匠による貝殻腹縁刺突文や貝殻以外による刺突文を施す一群である。口縁部から頸部の断面形は「く」の字状に屈曲するもの（64）以外は全て外反する。文様は羽状に貝殻刺突文を施すもの（58～60）、間隔のある貝殻腹縁刺突文を施すもの（62）、貝殻以外による刺突文を施すもの（61・63・64）に細分される。

### 6類（第18～21図 65～106・126～129）

有文土器と異なり文様の無い土器群である。65～88は口縁部または胴部である。口縁部形態は、波状口縁か平口縁を呈すし、口縁部から頸部の断面形は、直立するもの（66～72・84）、外反するもの（65・73・74・88）、肥厚帯をもつもの（75～80）とある。胴部形態は、膨らみをもつもの（65・82・

84・87)と窄まるもの(83・85)がある。また、整形の為の調整方法は、精製・粗製の条痕と条痕後ナデがある。63は他の土器群とは法量が異なり鉢形と捉えたい。

89~106は底部である。底部形態は底端が突出するもので網代底のもの(89~93)、底端が丸く網代底のもの(94~96)、木葉痕のもの(97)、ナデ調整のもの(98~103)、やや上げ底気味の形態でミガキ調整のもの(104~106)がある。

126~129は、口唇部の浅い沈線や瘤状突起等装飾的意識の乏しい文様であるため敢えてこのカテゴリーに分類した。

#### 7類(第22図 107~109)

縄文を主体とする土器で、口縁部に文様帯をもち、口縁部の縄文下位に8類と比べ幅の狭い無文帯をもつ土器群である。平坦な口唇部形態に沈線文と縄文を施すもの(107)と丸みを帯びた口縁部形態に幅広の縄文と沈線文を施すもの(108・109)がある。後者は、8類に近い様相がみられる。また、整形の為の調整方法は、ミガキである。

#### 8類(第22図 110~115・118)

縄文を主体とする土器で、口縁部が大きく外反し、頭部がくびれて胴部の張りが強い形態を呈する土器群である。口縁部に文様帯をもち、胴部にも直線的な沈線文と縄文による文様帯をもつ。また、整形の為の調整方法は、ミガキである。110~115は、鉢形の形態が想定され、118は、浅鉢の形態の可能性がある。111は、口縁部内面に縄文を施す。114は、施文部分に赤色顔料が塗彩されている。

#### 9類(第22図 116・117・119・120)

縄文を主体とする土器で、口縁部がやや内湾し、頭部がくびれて胴部がやや膨らむ形態を呈する土器群である。区画内に貝殻腹縁刺突文を施すものもある。120は、口縁部で横方向の細い沈線文を施し、波状頂部の文様集約部に縱方向の沈線文を施す。116・117は、胴部文様帯に先ず幾何学的に沈線文を施した後、その幾何学的沈線の区画内に貝殻腹縁刺突文が施される。

#### 10類(第22図 121・122)

縄文を主体とする土器で、口縁部が「く」の字状に屈曲し、頭部がくびれて胴部が張りのある膨らみをもつ形態を呈する土器である。121は、口縁部に沈線文とその間に貝殻文を施す。122は、胴部に縄文を施した後、数条の沈線文とその上部に刺突列点文を施す。また、内面には胴部と頭部の境に稜線が存在する。9類と比べて口縁部と胴部の屈曲度合いがシャープである。口縁部には口縁部と胴部に明瞭な境を持つ。

#### 未分類(第22図 123~125・130)

これまで分類した範疇に当てはまらない土器について一括して説明を行う。123は、直立の形態を呈する口縁部で横方向の細い沈線文を3条施し、土器片左端にも斜方向の沈線文が3条施される。120に近い様相をもつ。124は、口縁部で肥厚部分とその下位に凹線状の太い沈線文を横方向に施し、口唇部

には竹管状の刺突文が連続して施される。また、器壁が薄く丁寧なナデが施される。1類に近い様相をもつ。125は、胴部で横方向の細い沈線文を数条施した後、上から下へ向けて縱方向に刺突文施す。10類・11類に近い様相をもつ。130は、胴部で屈曲部下位にあたると想定される。内外面に丁寧なミガキを施し、外面に2条の沈線文を施す。沈線内には赤色顔料が塗られている。

## 第II群 台付皿形土器（第23～27図 131～202）

深鉢形の土器とは異なり皿部（浅鉢状にやや深いものも含む）と脚部（脚台部）による形態を呈する土器群である。土器群は文様構成と口縁部形態により細分する。文様については、有文土器と無文土器とに大別できる。有文土器の文様構成は、貝殻腹縁刺突文を含む刺突文、沈線文、縄文、突帯文である。これらを先ず皿部～胴部と脚部に分け、それぞれを文様意匠により4種に細分する。なお、小片の土器も含まれているが、第II群に分類した根拠として、類似する土器片が明らかに台付皿形の形態を呈していること、傾きや文様の施文箇所が第I群と明らかに異なること、顔料が塗彩されていること、内外面の調整に明瞭な差が看取されること、脚部は透かしの痕跡が看取されることがあげられる。

### 皿部～脚部

A類（131～146）…文様の施文部位が狭く、文様が単体で構成される一群である。竹管状の刺突文を施すもの（131～135）、それ以外の刺突文を施すもの（136・137）、口縁部に沈線文を施すもの（138～141）、内面に沈線文を施すもの（142・143）、豚の鼻状に刺突文を施すもの（144）口唇部に刻み目を施すもの（145・146）に細分される。

B類（147～159・163）…文様の施文部位が広く、文様を複合させて施す一群である。口唇部に刻み目と沈線を施すもの（147）、貝殻腹縁刺突文を2段に施すもの（148）、沈線の間に刺突文を施すもの（149～151）、沈線文による区画内に縄文や刺突文を施すもの（152～157）、口縁部に突帯文とその他の文様を複合するもの（158・159・163）に細分される。

C類（164～175）…口縁部に突起をもつもので、平面形四角形の波状になる一群である。形状が親指の大大きな突起をもつもの（164～167）、波頂部が肥厚するもの（168）、形状が小さな突起をもつもの（169～175）に細分される。

D類（176～184）…文様のない一群である。文様による装飾はみられないが、176・177・181・183・184は顔料による装飾がある。

### 脚部

a類（185～190）…文様の施文部位が狭く、文様が単体で構成される一群である。直線的な脚部で沈線を施すもの（185）、文様帶上部に緩い屈曲をもち沈線文を施すもの（186～188）、直線的な脚部で器壁が厚く貝殻腹縁刺突文を施すもの（189・190）に細分される。

b類（191・192）…文様の施文部位が狭く、文様を複合させて施す土器である。191・192は文様帶上部に緩い屈曲をもち沈線文の区画内に短沈線を施す。

c類（160～162・193～194・196）…文様の施文部位が広く、文様を複合させて施す一群である。直線的な脚部に突帯文と刻み目を施すもの（160～162）、底端が張り出し短い沈線文と瘤状の突起を複合させるもの（193・194）、底端が張り出し沈線文を周辺に

巡らすもの（196）に細分される。

d類（197～202）…文様の無い脚部である。形態には文様帶の名残か稜線をもつものや直線的なもの  
裾部が広がるものなどヴァリエーションが豊富である。

その他（195）……把手状の土器小片であるため深鉢形の形態に装着するものか皿形土器に装着する  
ものの不明であったが、顔料を塗彩することから装饰性の高い土器片であるため、  
このカコテゴリーに分類した。

## 2) 円盤形土製加工品について（第27図 203～216）

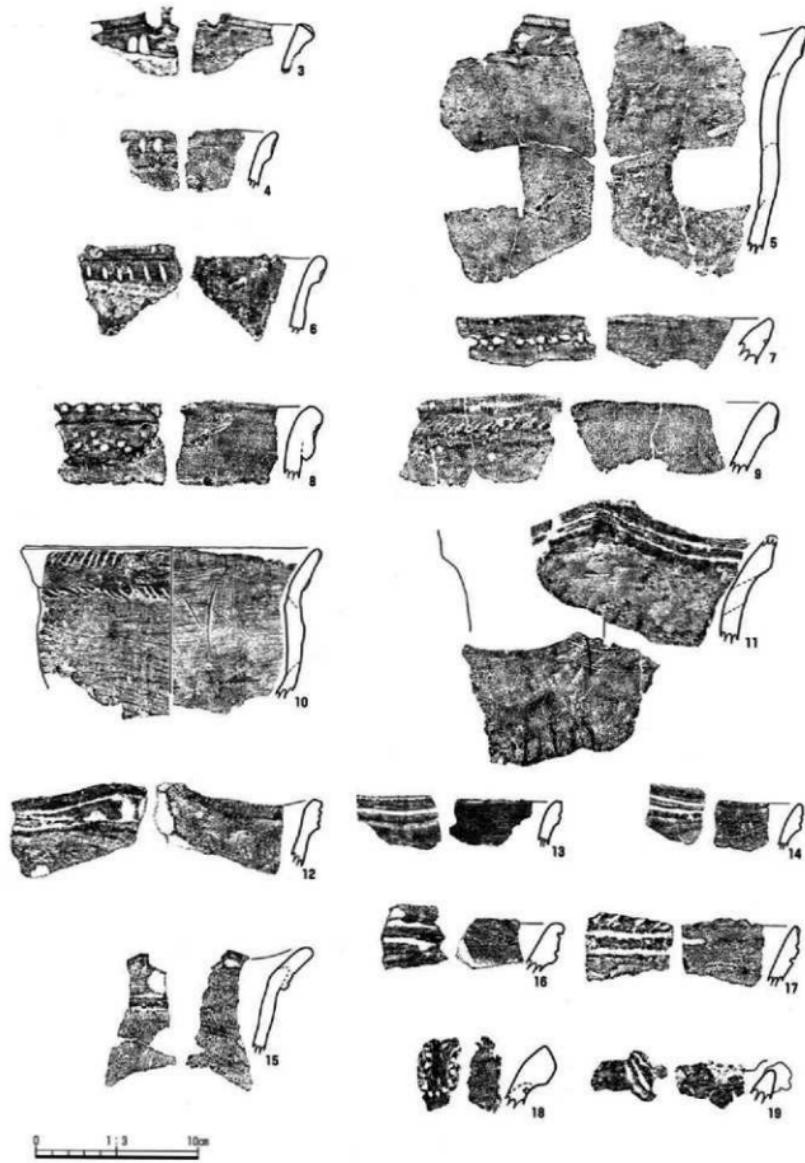
器としての機能をもつ粘土製品である土器とは異なり、土器の破片を二次的に利用して加工を行った  
円盤形の土製品について説明を行う。

203～216は、破損した土器片内で円形の形態を呈し、周辺に研磨や打ち欠きによる加工の痕跡を看取  
できる土器である。これらの加工品は円形を形成する整形方法により2つに大別できる。研磨により加  
工するもの（203）と周辺を打ち欠きで加工するもの（204～216）である。上器型式は、貝殻文系の上  
器と条痕調整の無文土器であることから、丸尾式あるいはその前後の土器型式に相当する可能性が高い。  
計測による各項目の平均値は最大長3.8cm、最大幅3.9cm、最大厚0.9cm、平均重量222gであったことから、  
半径2cmで厚みが1cm前後の円盤形に加工されているようである。

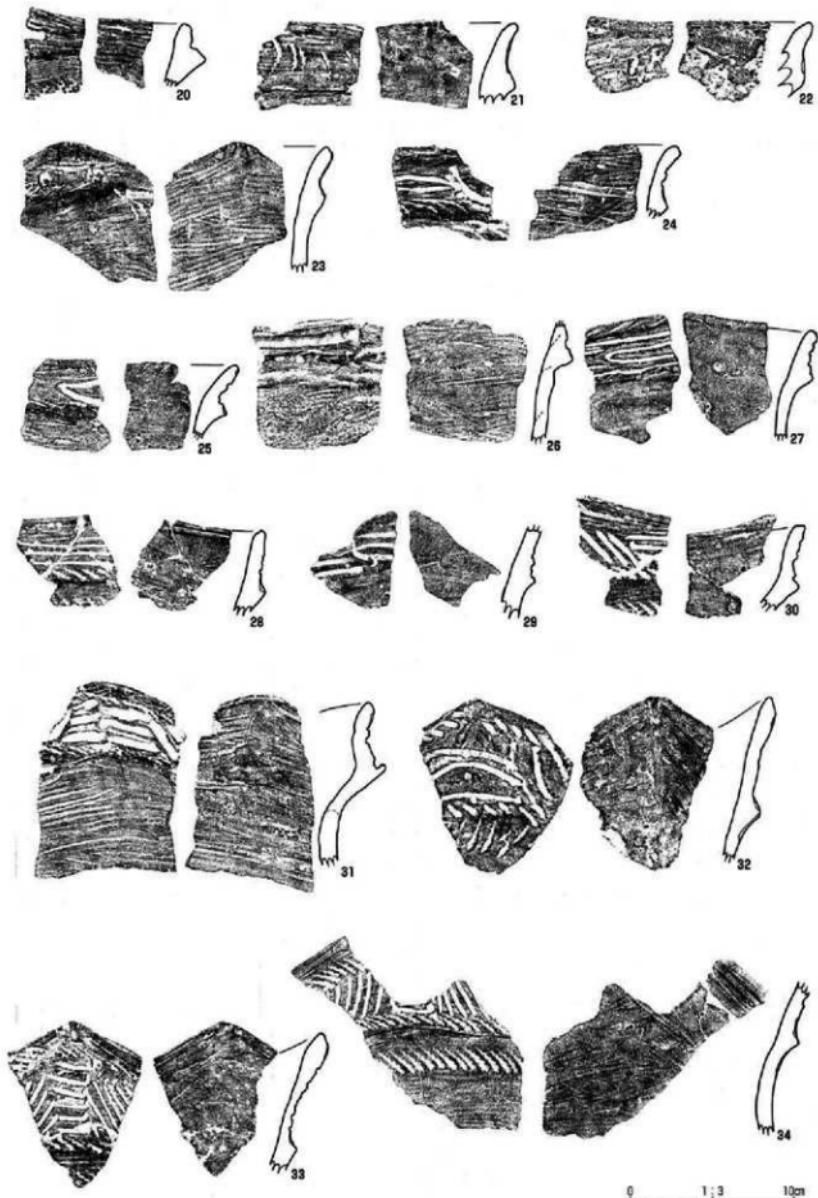
### 小結～縄文土器について～

細別した第Ⅰ群の土器を型式学的な編年序列に集約して小結としたい。1類は指宿式、2・3類は市  
来式系、4類は市来式、5類は丸尾式、7類は鐘崎式系、8類は北久根山式、9類は納曾式、10類は西  
平式、未分類130は黒色磨研土器(晚期前半)に相当すると考えられる。4～5類の貝殻文系土器の変遷は  
スムーズである。また、土器量の多寡から貝殻文系土器群が主体を成し丸尾式期にピークを迎えること  
がわかる。対照的に、磨消縄文系土器(7～10類)は客観的で土器型式に断絶が見られる。

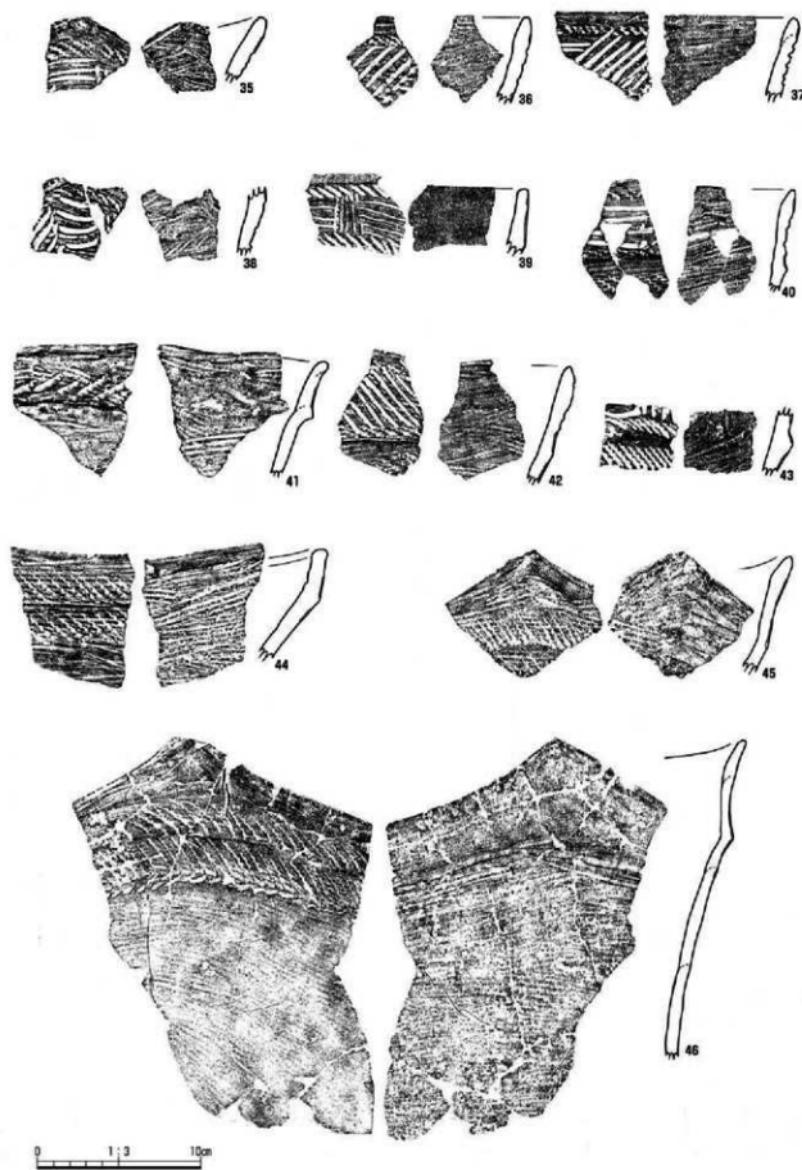
また、市来式系・鐘崎式系とした土器群は従来の型式概念と相違がみられ、同町大谷遺跡でもみられ  
ることから山間部に位置する在地系土器とも捉えられる。無文土器(6類)の口縁部形態については、  
市来式と同様の形態がみられる点は注意したい。また、第Ⅰ群と第Ⅱ群の関係や塗彩については、第V  
章で述べることとする。



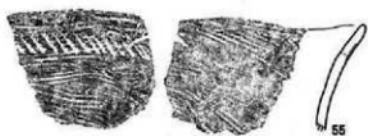
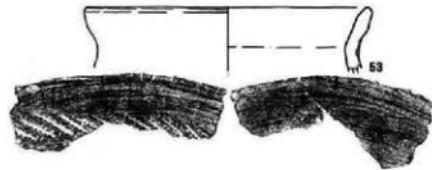
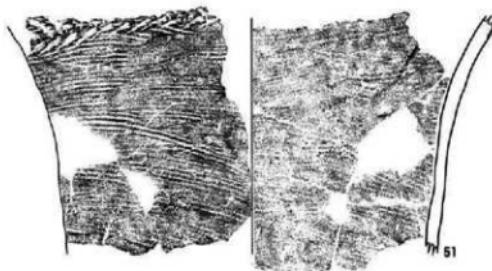
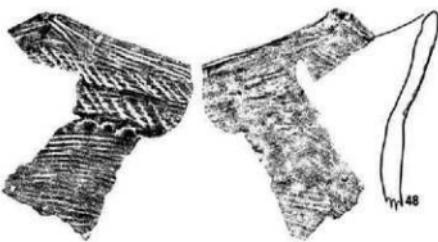
第13図 繩文土器 実測図(1/3)



第14図 繩文土器 実測図(1/3)

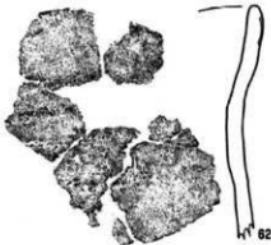
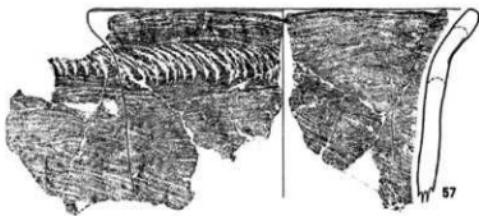


第15図 繩文土器 実測図(1/3)

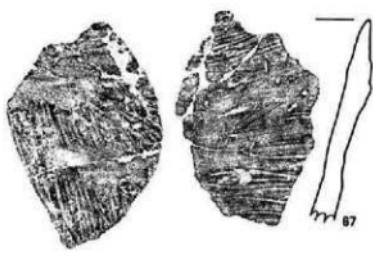
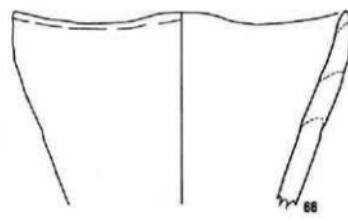
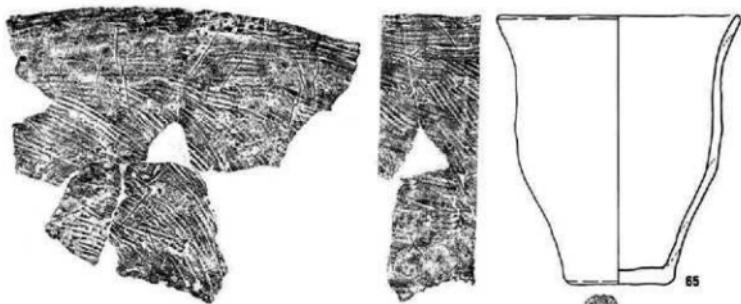


0 1:3 10cm

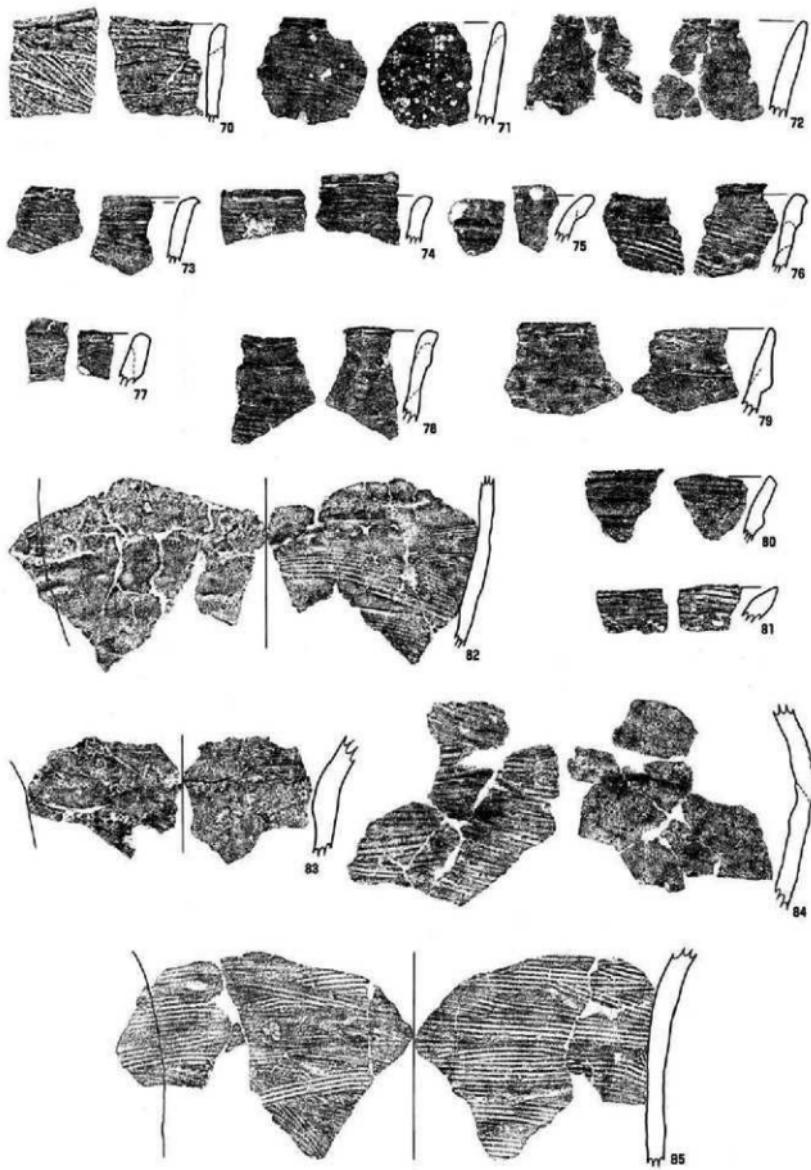
第16図 繩文土器 実測図(1/3)



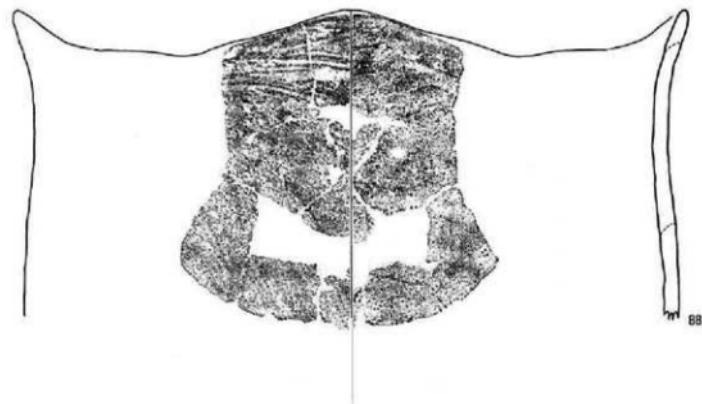
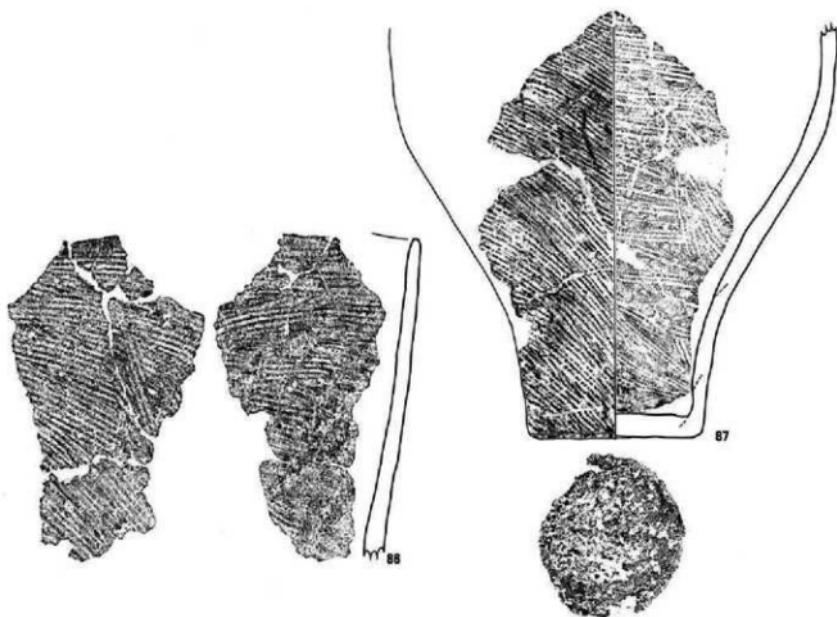
第17図 繩文土器 実測図(1/3)



第18図 繩文土器 実測図(1/3)

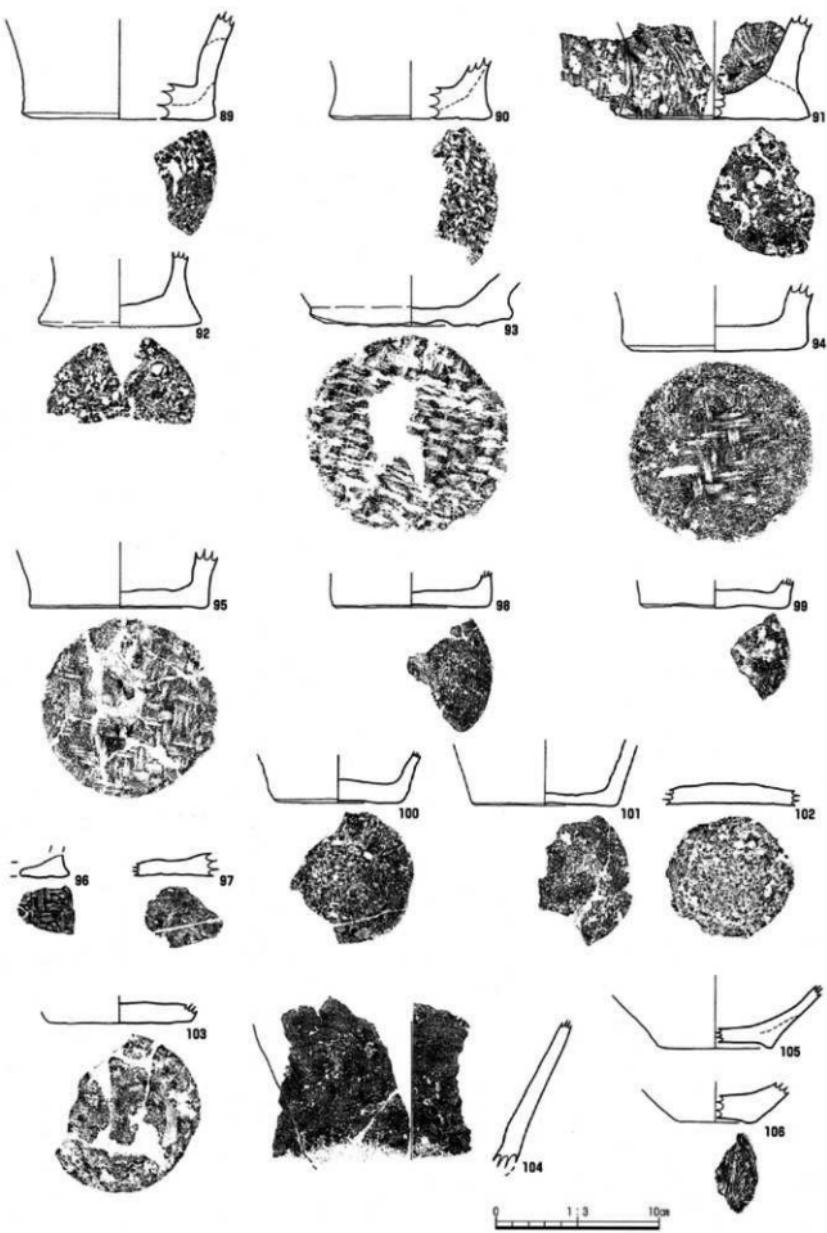


第19図 繩文土器 実測図(1/3)

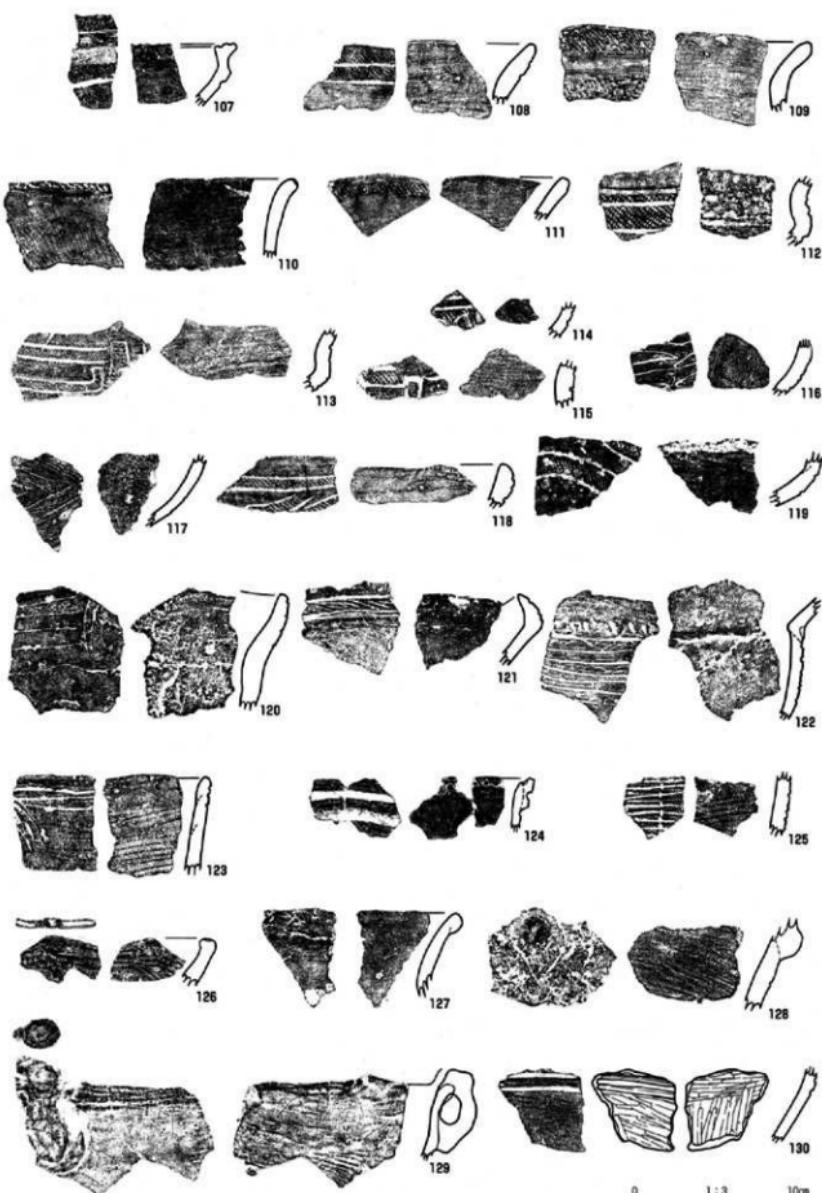


0 1:3 10m

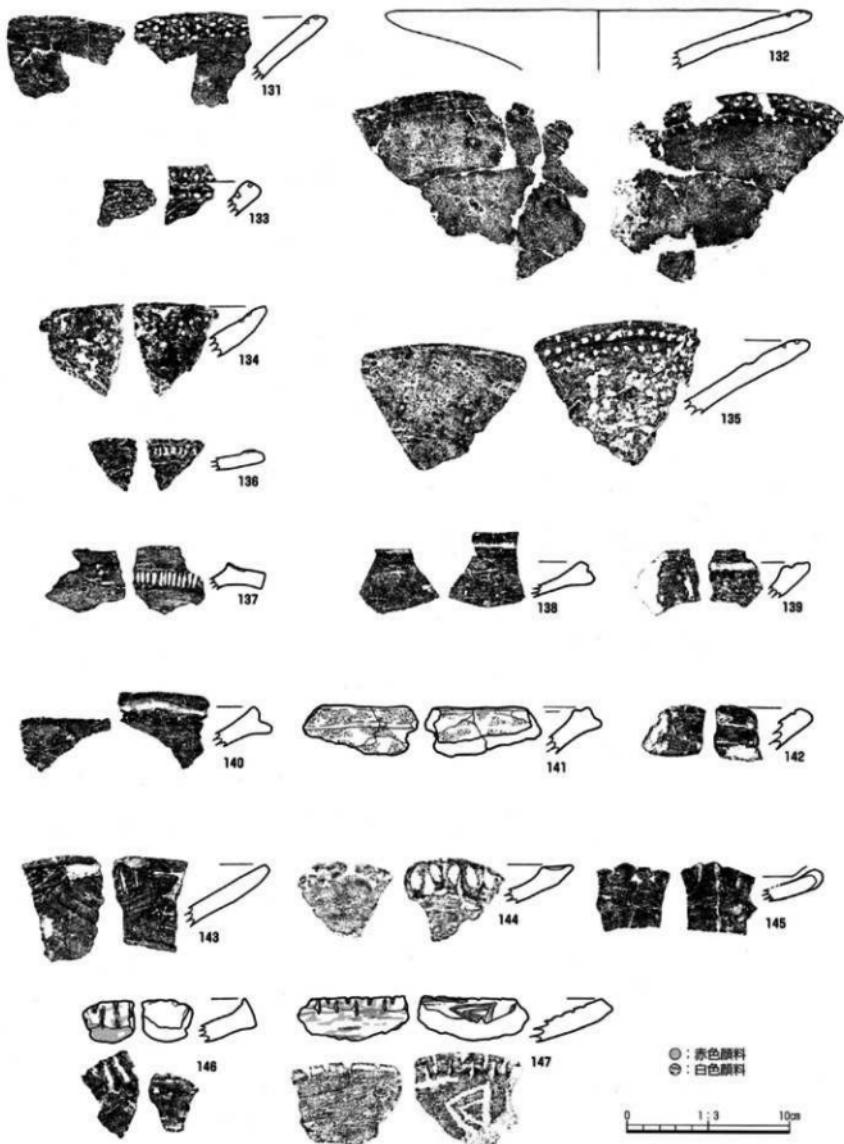
第20図 繩文土器 実測図(1/3)



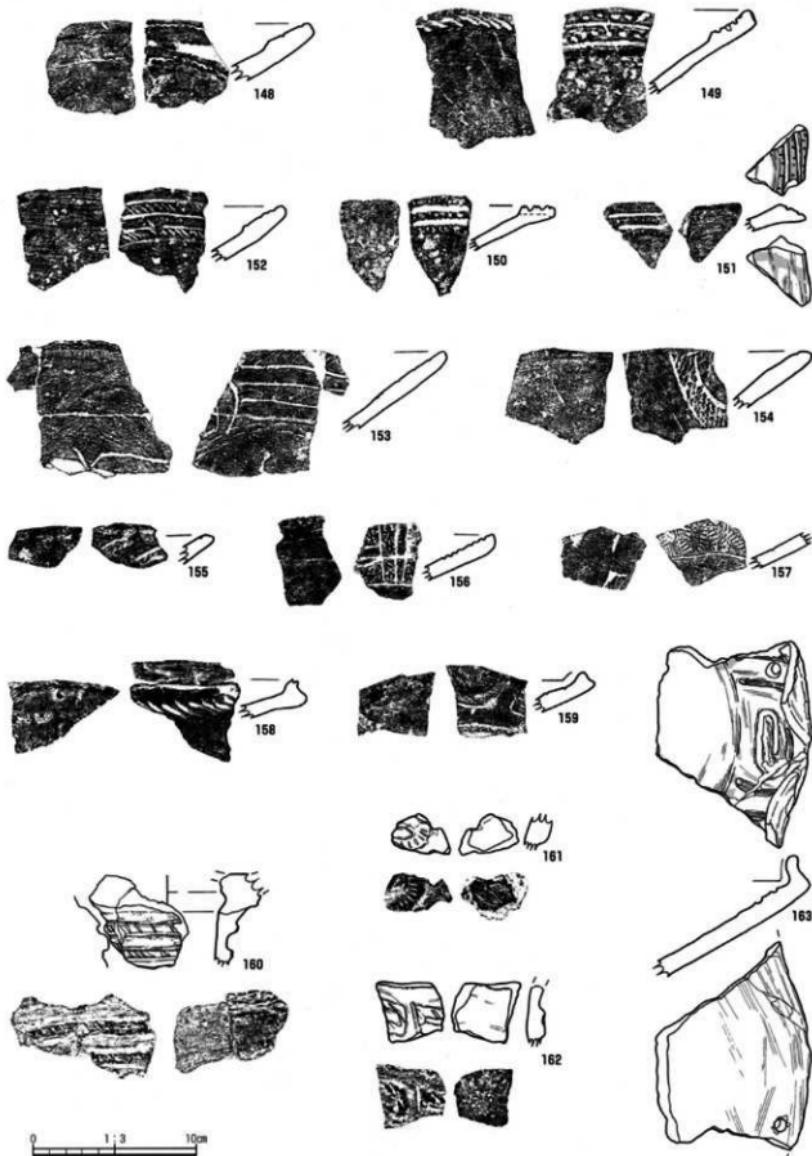
第21図 繩文土器 実測図(1/3)



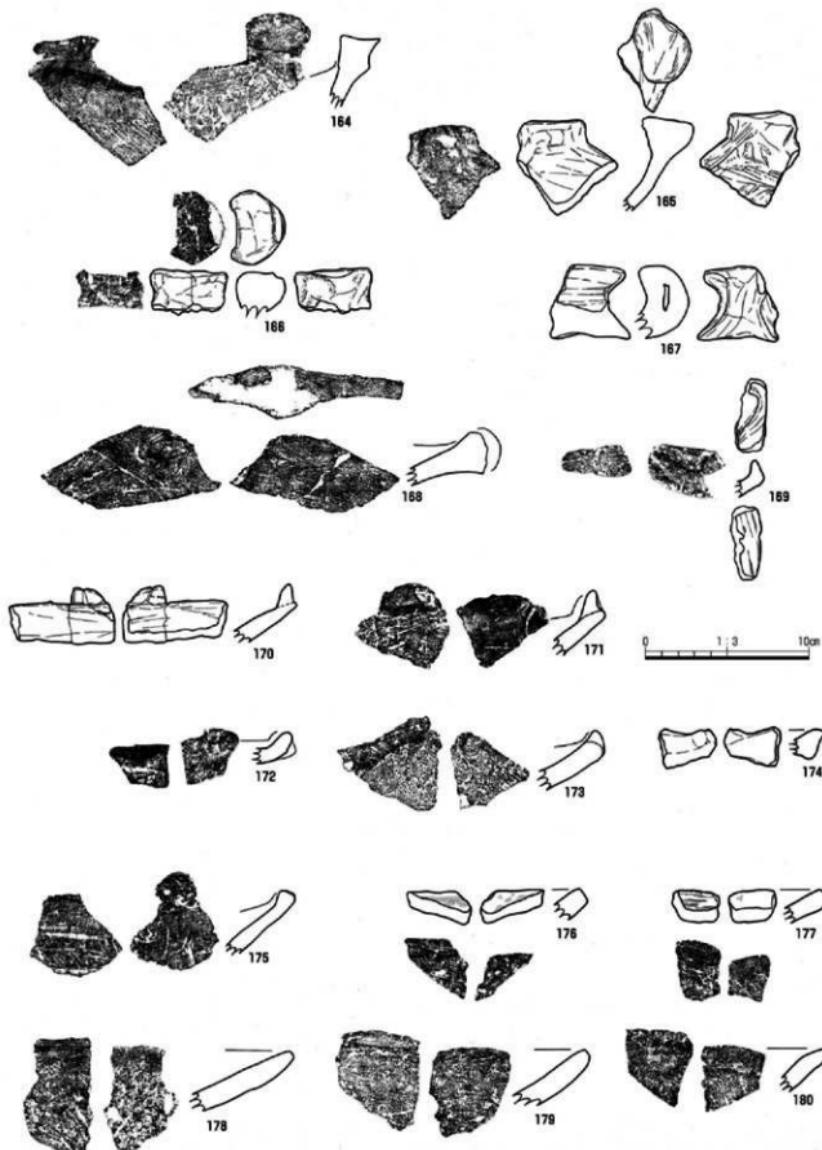
第22図 繩文土器 実測図(1/3)



第23図 繩文土器 実測図(1/3)

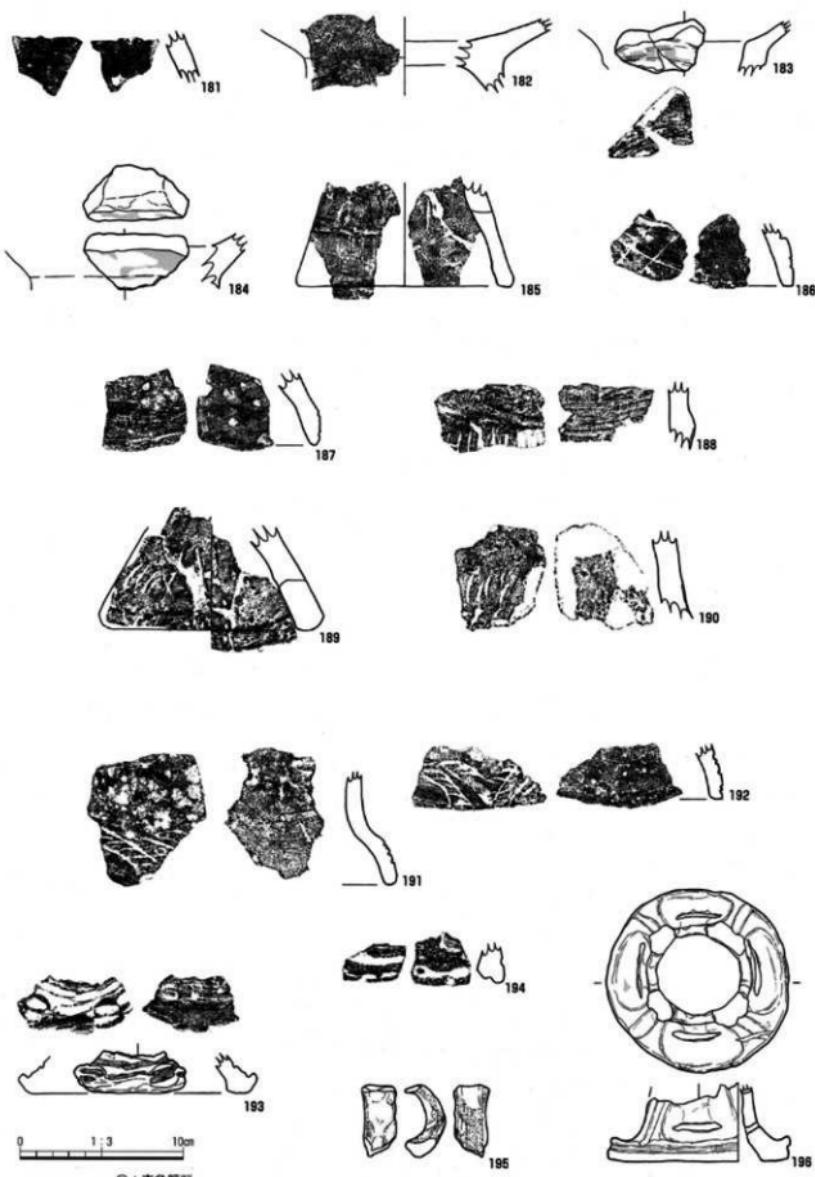


第24図 繩文土器 実測図(1/3)

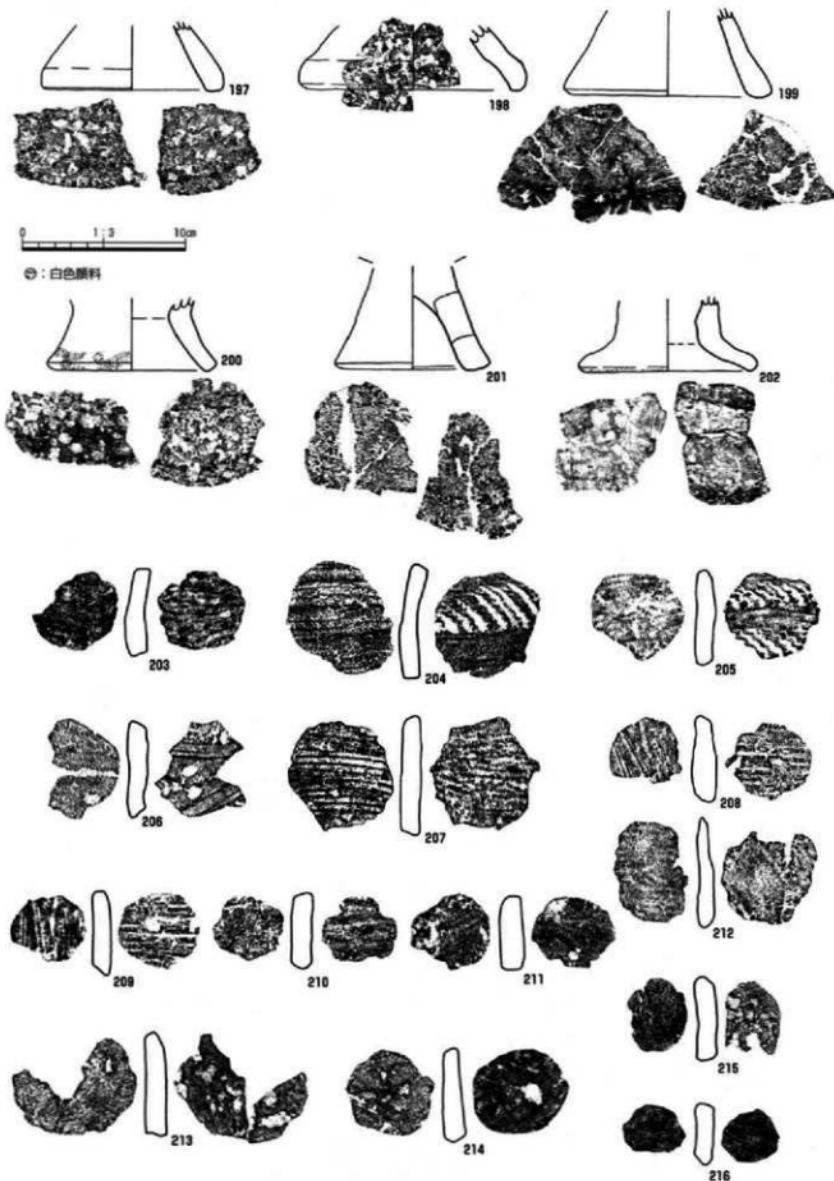


◎：赤色顔料  
◎：白色顔料

第25図 繩文土器 実測図(1/3)



第26図 繩文土器 実測図(1/3)



第27図 繩文土器・円盤形土製品 実測図

第1表 繩文土器觀察表

第2表 繩文土器觀察表

第3表 繩文土器觀察表

No.	器種	部位	層位	箇文・調査等		出土	光沢あり	光沢なし	注	測定	剖面	層	明	暗	色調 (4段階標準土)	
				西	東											
174	直形	口縁部	一括	外 ナマ→網状が剥げ	内 ナマ	○ ○	○ ○	黒								1-35-4 黒 GSYR5-2
175	直形	口縁部	Vb	外 細い側面→折入 内 細い側面→テープ		○ ○	○ ○									1-35-5 黒 GSYR5-2
176	直形	口縁部	V-括	内 ナマ		○ ○	○ ○									ガリバー直形 GSYR3-1
177	直形	口縁部	VI-括	外 細い側面		○ ○	○ ○									1-35-6 黒 GSYR5-2
178	直形	口縁部	Vb	内 ナマ		○ ○	○ ○	黒								1-35-7 黒 GSYR4-3
179	直形	口縁部	Vb	内 ナマ		○ ○	○ ○	黒								1-35-8 黒 GSYR5-6
180	直形	口縁部	Vb	外 ナマ→風化が剥げ 内 ナマ		○ ○	○ ○									1-35-9 黒 GSYR5-6
181	直形	両脇部	V-括	外 ナマ		○ ○	○ ○	黒								1-35-10 黒 GSYR5-6
182	直形	両脇部	Vb	外 ナマ		○ ○	○ ○	黒								1-35-11 黒 GSYR5-6
183	直形	両脇部	Vb	内 ナマ(吸水膨胀率12.4%)		○ ○	○ ○	黒								1-35-12 黒 GSYR5-6
184	直形	両脇部	Vb	内 ナマ		○ ○	○ ○	黒								1-35-13 黒 GSYR5-6
185	直形	両脇部	Vb	外 ナマ→吸水膨脹、通達し有り		○ ○	○ ○	黒								1-35-14 黒 GSYR5-6
186	直形	両脇部	Vb	内 ナマ→火候		○ ○	○ ○	暗赤								1-35-15 黒 GSYR5-6
187	直形	両脇部	V-括	ナマ→吸水膨脹、通達し有り		○ ○	○ ○	黒								1-35-16 黒 GSYR5-6
188	直形	両脇部	Vb	内 ナマ→火候		○ ○	○ ○	黒								1-35-17 黒 GSYR5-6
189	直形	両脇部	Vb	ナマ→具付吸水膨脹剥離、通達し有り		○ ○	○ ○	黒								1-35-18 黒 GSYR5-6
190	直形	両脇部	Vb	内 ナマ→具付吸水膨脹剥離		○ ○	○ ○	黒								1-35-19 黒 GSYR5-6
191	直形	口縁部	Vb	ナマ→火候		○ ○	○ ○	黒								1-35-20 黒 GSYR5-6
192	直形	両脇部	Vb	内 ナマ→火候		○ ○	○ ○	暗赤								1-35-21 黒 GSYR5-6
193	直形	両脇部	Vb	ナマ→吸水膨脹剥離→吸水膨脹 内 ナマ→火候		○ ○	○ ○	暗赤								1-35-22 黒 GSYR5-6
194	直形	両脇部	V-括	ナマ→火候、通達し有り		○ ○	○ ○	黒								1-35-23 黒 GSYR5-6
195	直形	両脇部	Vb	内 ナマ→火候、表面に透かし有り		○ ○	○ ○	黒								1-35-24 黒 GSYR5-6
196	不明	不明	Vb	内 ナマ(透跡口の付着部分)		○ ○	○ ○	黒								1-35-25 黒 GSYR5-6
197	直形	両脇部	Vb	内 ナマ		○ ○	○ ○	黒								1-35-26 黒 GSYR5-6
198	直形	両脇部	Vb	外 瓦礫が混じる小形		○ ○	○ ○	黒								1-35-27 黒 GSYR5-6
199	直形	両脇部	Vb	内 ナマ(吸水膨脹12.5%)		○ ○	○ ○	黒								1-35-28 黒 GSYR5-6
200	直形	両脇部	V-括	内 ナマ		○ ○	○ ○	黒								1-35-29 黒 GSYR5-6
201	直形	両脇部	V-括	内 ナマ→透かし、右側 内 ナマ→吸水膨脹、薄右側付近鉢の漏れの可能性あり		○ ○	○ ○	黒								1-35-30 黒 GSYR5-6
202	直形	両脇部	V	外 瓦礫が混じる小形		○ ○	○ ○	黒								1-35-31 黒 GSYR5-6

#### 円盤形土器製品

No.	器種	部位	層位	箇文・調査等		出土	光沢あり	光沢なし	注	測定	剖面	層	明	暗	色調 (4段階標準土)	
				西	東											
203	円盤	-	Vb	外 ナマ→吸水膨脹 内 ナマ(11.4%)		○ ○	○ ○	黒								1-36-1 黒 GSYR5-2
204	円盤	-	Vb	外 金継→其吸水膨脹剥離→打ち欠き		○ ○	○ ○	黒								1-36-2 黒 GSYR5-2
205	円盤	-	Va	内 金継→吸水膨脹剥離(17.5%)		○ ○	○ ○	黒								1-36-3 黒 GSYR5-2
206	円盤	-	Vb	外 ナマ→剥離→吸水膨脹→打ち欠き		○ ○	○ ○	黒								1-36-4 黒 GSYR5-2
207	円盤	-	Vb	内 金継→打ち欠き 内 破損(25.5g)		○ ○	○ ○	黒								1-36-5 黒 GSYR5-2
208	円盤	-	Vb	外 金継→打ち欠き		○ ○	○ ○	黒								1-36-6 黒 GSYR5-2
209	円盤	-	VI-括	内 金継→打ち欠き 内 破損(10.0g)		○ ○	○ ○	黒								1-36-7 黒 GSYR5-2
210	円盤	-	VI-括	内 金継→(10.0g)		○ ○	○ ○	黒								1-36-8 黒 GSYR5-2
211	円盤	-	Va	外 ナマ→打ち欠き 内 ナマ(11.4%)		○ ○	○ ○	黒								1-36-9 黑 GSYR5-2
212	円盤	-	VI-括	内 ナマ→打ち欠き 内 ナマ(11.4%)		○ ○	○ ○	黒								1-36-10 黒 GSYR5-2
213	円盤	-	Vb	外 ナマ→打ち欠き		○ ○	○ ○	黒								1-36-11 黒 GSYR5-2
214	円盤	-	Vb	内 ナマ→(16.5g)		○ ○	○ ○	黒								1-36-12 黒 GSYR5-2
215	円盤	-	VI-括	外 ナマ→打ち欠き		○ ○	○ ○	黒								1-36-13 黑 GSYR5-2
216	円盤	-	一括	外 ナマ→打ち欠き 内 破損(5.5g)		○ ○	○ ○	黒								1-36-14 黑 GSYR5-2

\*1 四形切石付円盤形土器 円盤は円盤形土器を示す

\*2 沈土 元穴式 透跡 清水 黒一舟形 砂質 黒一白色 -石英

\*3 沈土 元穴式 透跡 清水 黒一舟形 砂質 黒一砂質

\*4 他調 立方体付円盤形土器 金-立石 壁-砂質 黑地-黒地 壁の端でそれに接する位置に隙間をもつものである。

KH灰瓦 黒 柄 磁 非可塑性質

2 50 6 94 37 95 69 18 48 8 7427

第4表 縄文土器観察表

分類	M番	Vb番	Vd番	Vf番	Vg番	Vh番	Vj番	Vl番	Vn番	Vp番	Vq番	Vr番	Vt番	Vw番	Vx番	Vz番	合計
深井文	2種	5	4	1	12												291
脚	3種	6	2	1	23	3	3	3	5	5	5	5	5	5	5	5	44
脚	4種	1	1	1	22	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	39
脚	5種	2	2	1	17	13	20	21	21	21	21	21	21	21	21	21	59
脚	6種	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9
脚	7種	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10
脚	8種	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9
脚	9種	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9
脚	10種	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	20
脚	脚	7	7	7	34	6	47										77
脚	脚	6種	538	94	289	1663	445	3029	3092								
脚	脚	1種	10		6		16										
脚	合 計	585	107	331	1915	489	3427										

第5表 縄文土器調査表

### 3) 石器について

本遺跡で出土した石器は総数250点で、その他、レキが174点出土していた(第28図・第6表)。前項の土器と同様石器についても型式学的器種を基軸に分類作業を行った。出土した石器は、機能的側面において実用的な石器(第I群)と非実用な石器(特殊な石器: 第II群)に大別し、さらに実用的な石器を石器製作から剥片石器と礫塊石器に細別する。剥片石器は、石鎚・スクレイパー・石錐・石核・剥片等が出土しており、礫塊石器は、磨製石斧・石錘・敲石・磨石・石皿・台石が出土している。非実用的な石器としては、異形石器・ベットストーンが出土している。

以下、項目毎に説明を行う。

#### 第I群 実用的な石器: 剥片石器

##### 石鎚(第29図 217~225)

打製石鎚が多く、局部磨製石鎚が1点含まれる。石材は、桑ノ木津留産・腰岳産黒曜石や砂岩・頁岩・チャート・玉髓があり、特定石材に偏ることはない。石鎚は、基部形態から深い凹基・浅い凹基の2種に分けられる。深い凹基には、平面正三角形(217~221)と二等辺三角形(223)のものがある。浅い凹は、素材剥片の周縁部のみを簡単に整形した平面二等辺三角形(222)のもの、厚みを残す略正三角形のもの(225)がある。局部磨製石鎚(224)もこれに含まれる。この他、未図化であるが桑ノ木津留産黒曜石製の打製石鎚が1点ある。

##### スクレイパー(第29・30図 226~236)

縦長或いは横長の剥片の縁辺に連続する剥離を施し刃部を形成する一群である。石材は、1点のみ頁岩(226)で他は砂岩である。頁岩製の226はやや厚みがあり、刃部形成は石質により階段状剥離となっている。残存する自然面の状態から石核を転用したものとみてよかろう。砂岩製スクレイパーの素材剥片は縫面を残すものが多く、打面調整なく剥離された大ぶりかつ一定の厚みを有する剥片である。中には、227・233のように背面全面が縫面のものも見られる。加工は剥片縁辺に鈍角な剥離調整が見られる。また、227・229・230は自然面に研磨痕や剥離面にツブレの痕跡もみられ、使用にも伴うものであろう。いずれにせよ、後述の粗製剥片石器とのつながりが強く看取される。

##### 粗製剥片石器(第30~33図 237~278)

粗雑な剥片剥離作業が看取され定型的な器種としては認定し難いが、砂岩を主体とした剥片の一群である。砂岩以外には、火山岩系の石材が少量見られる。剥片の多くは、縫面から打面調整を行わず剥離されたものである。また、打面を中心に剥離の衝撃等により剥離軸に沿って割れてしまったものも多く見られる。これらを剥片剥離の工程・打面性状・剥片形態の差異からI~IV類に細分する。

I類(237~298)…正面全体に自然面を残すことから、母岩から最初に剥離された剥片と想定される。

剥離は打面調整なしで縫面から実施される。剥片は蛤状の幅広の横長剥片で、断面形が半月或いは隅丸角錐形となる。鋭利な剥片端部に使用痕がみられる。

II類(299~258)…正面に1枚以上の剥離面を持つことから2枚目以降に剥離された剥片と想定される。

剥離は打面調整なしで縫面から実施される。剥片剥離作業時の垂直割れも見られる。剥片は幅広の横長剥片で、断面形が台形状となるものが多く見られる。側辺または

剥片端部の鋭利な箇所に使用痕がみられる。

III類 (259~274) …正面の剥離も多くみられることから、ある程度剥片剥離が進行した工程での剥片と想定される。剥離は打面調整なしで裸面から実施される。271(接合資料)のように、剥片剥離作業時の垂直割れも見られる。剥片は縦長で、断面形が隅丸角錐形もしくは台形状となる。272~274は、側辺部に使用痕あるいは小剥離痕が観察される。

IV類 (275~278) …ある程度剥片剥離が進行した工程での剥片と想定される。打面は剥離面である。剥片は幅広の横長剥片で、大半は自然面を残す。厚さは様々であるが、断面形は台形状となる。剥片端部に使用痕がみられる。

これら砂岩製石器の特徴として、打面形成の為の調整を行わず、打面を固定して一定方向からの剥離を行っていることが見える。また、横長・縦長を問わず垂直割れが接合資料中に多く看取される。剥片剥離は単純粗雑であり、明確な目的剥片があったようにも見えない。必要条件を満たした剥片であれば刃器として利用したのであろう。なお、271(接合資料)は、打面ほか裸面が赤化しており、剥片剥離以前に火熱を受けたものと見られ、注意を要する。

#### 石錐（第34図 280）

石材はチャート製で、縦長剥片の末端部に裏面側から細かく加工し錐部を形成している。石錐は、掲載した1点のみの出土である。

#### 剥片（第34図 281~290）

ここでは237~278とは異なり、打面形成を行った後、縦長或いは横長の剥片を剥離している剥片を括して扱う。石材には、日東産・桑ノ木津留産黒曜石・チャート・頁岩・砂岩製のものがみられる。281~285は縦長剥片、286~290は横長剥片である。日東産黒曜石を除いて、これらの多くは石錐等のツール製作に関連したものと想定される。290は、剥片頭部から側辺部にかけて細かい剥離がみられ、石錐の未製品である可能性もある。285~288も二次加工がみられる。

#### 石核（第34図 291~293）

石材が黒曜石で、最終形態が小型の形態を呈する石核である。一部に自然面を残し、打面形成を行った後、剥片剥離作業を行っている。また、剥片剥離の方向も打面転移を行いながら複数方向から剥片を作出している。

#### 第II群 非実用的な石器（特殊な石器）

##### 円盤状石器（第35図 294）

隅丸正方形の縦方向に剥離された扁平な剥片で、周辺に鈍角な剥離調整を行っている。一部不明瞭な剥離痕があるが、何らかの使用の結果と想定される。石材は凝灰岩である。さらに、表面の端部には白色物の付着が看取される。白色塗彩を施した土器群との関係を含め注目したい。類品の出土は、掲載した1点のみである。

#### 異形石器（第35図 295）

石材はチャート製で半月状の形態を呈す。その形態的特徴から異形石器とした。石器周縁部に細かい調整がみられる。

#### 有孔石製品（第35図 296・297）

加工・無加工に関係なく孔を有する石器を一括して扱う。296は石材がホルンフェルスで無加工の自然石である。この石材はノジュールとも呼ばれ、孔や凹みが自然に生じているもので河原等でも拾うことができる。自然石ではあるものの、縄文後期に遺跡に撒入される例は多い。297は軽石製の有孔石器で、表面から裏面に向けて尖孔が穿たれている。尖孔の形状は、1.3cmと全体の約1/10の大きさにあたる。裏面の方がより平滑に研磨される。

#### ベットストーン（第35図 298）

つややかな手触りのチャート製で、所謂ベットストーンの可能性がある。

### 第1群 実用的な石器：砾塊石器

#### 石斧（第34図 279）

断面形や整形方法などから磨製石斧として捉えたい。磨製石斧は、掲載した1点のみ出土した。石材はホルンフェルスで、窄まった基部に近い部分と想定される。側辺部を中心に敲打調整を行った後、研磨を施す。欠損が著しい。

#### 石錘（第35図 299～303）

自然砾の一部に加工を施し、かつ錐具に相当すると考えられるものを加工の方法により2つに分類する。299～301は、長軸方向に切り目を入れる切目石錘である。300は、一見自然石のようであったが、わずかに切り目を確認できた。302・303は、長軸方向に打ち欠きを施す打欠石錘である。重量は、平均して切目石錘が24.7g、打欠石錘が47.3gと切目石錘が軽い。形態からもその大小の差は明瞭である。

#### 敲石（第36図 304～316）

サイズや形態により大中小の3種に分類するが、研磨の有無や敲打痕の残存部位など使用痕跡によりヴァリエーションがある。大型は掌サイズ、中型は親指から中指の3本で固定可能なサイズ、小型は親指と人差し指で固定可能なサイズである。304～307は、小型サイズであるが、305は、側辺部をラウンドして敲打されている。306・307は、端部に微細な敲打が確認される。308～313は、中型サイズであるが、309は、砂岩製で敲打痕の残る周辺部に風化が観察される。310～312は、平面に光沢の強い研磨が施されている。313は、ドーム形の断面形で頂部のみ敲打が施される。石材はノジュールと考えられる。314～316は、大型サイズであるが、形態は破損品も含まれることもあり石材を含め様々である。特に316は、部厚く短冊状に剥離されており、側辺部と平面に敲打痕がみられる。

### 磨石（第36図 317・318）

317は、破損しているが掌サイズの円礫と想定でき、表裏に研磨が施され光沢がみられる。石材は尾鈴山酸性岩類である。地理的環境から搬入品の可能性が高い。318は円礫が分割され、その分割面に研磨を施している。掌サイズで固定できる。石材は砂岩である。

### 台石（第37図 319～322）

319の砂岩を除き凝灰岩で構成される。319は、18.8kgと重く出土地点も緩斜面に位置することからそれほど原位置からの遊離はないものと想定される。321・322は欠損資料であるが、一部研磨と思しき箇所もみられる。320は表裏の色調及び手の感触から明瞭な凹みはみられないものの中央部及び側辺部に敲打と思しきものがみられる。掌より大きいサイズであることから蔽石としての用途より受け皿の用途として捉えたい。

### 石皿（第37図 323）

323は重量524kgと重く、側辺から中央にかけて研磨による明瞭な凹みを有している。石材は凝灰岩である。

### 小結～石器について～

石器について組成と石材についてまとめ小結としたい。石器組成は、磨石・蔽石に比べ剥片石器が組成の3／4にあたり出土量が突出していることがわかる（第6表・グラフ1）。これは、砂岩製の粗製剥片がその出土量の大半であることを示している。前述の形態分類から石器製作工程の一部が垣間見える点からも、頻度の高い製作作業と使用が窺える。形態的特徴や出土量から「使い捨て」的性格が強くみられる。この剥片石器の類品を縄文後晩期に絞り県内で集成してみると清武町白ヶ野遺跡・宮崎市右葛ヶ迫遺跡・えびの市上田代遺跡で砂岩製の類例がみられる。さらに、頁岩など堆積岩系の石材にも類品がみられる。<sup>1)</sup> その生産や機能・用途については、縄文早期の鎌形剥片石器・背部二次加工素刃石器（宮田1991 小畠2004）・蛤刃石器（宮崎県埋蔵文化センター2002）との関連を含め、今後の課題としたい。

また、粗製剥片石器を除く器種・石材組成を見ると、先ず日東産黒曜石の出土量が目立つ。同石材には剥片・碎片・石核の存在から周辺で剥片剥離のあったことは疑いないものの、対応するトゥール類が見あたらない。一方で、腰岳産黒曜石・玉髓製石歯については1点のみと少なく、また製作に関わる剥片・石核等が皆無である。チャート・桑ノ木津留産黒曜石はトゥール類から剥片・碎片まで見られ、石器製作から一部においては使用までの工程が窺える。いずれにしても、比較的広域の石材産地のものが看取されることは、粗製剥片石器や石錘や蔽石等に周辺で獲得可能な石材が使用されている点と対照的である。ただし、少數ながらも、県央に存在する尾鈴山酸性岩類が磨石として使用されている点もあり、その関連性は一様ではない。

註1) 立神勇志氏によれば、近年東九州自動車道建設に伴う発掘調査により尾鈴山酸性岩類の粗製剥片石器が児湯郡地区を中心に多数みられるという。

### 【引用文献】

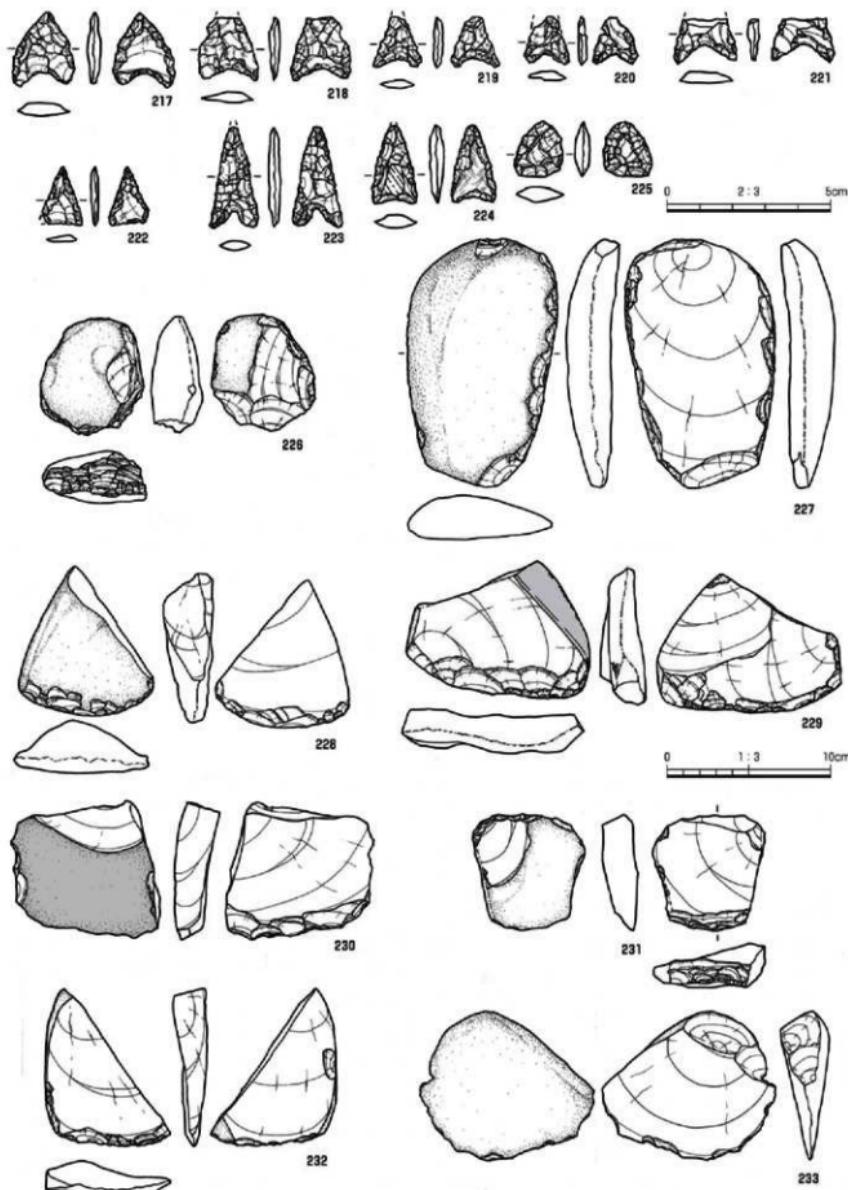
小畠弘己2004「磨製石器と植物利用～南九州地方における縄文時代草創期～早期前半の石器生産構造の再検討～」「極東および環日本海における更新世～完新世の狩猟道具の変遷研究」

宮田栄二1991「鎌形剥片石器－南九州縄文早中期の特殊な石器」『南九州縄文通信』No.4

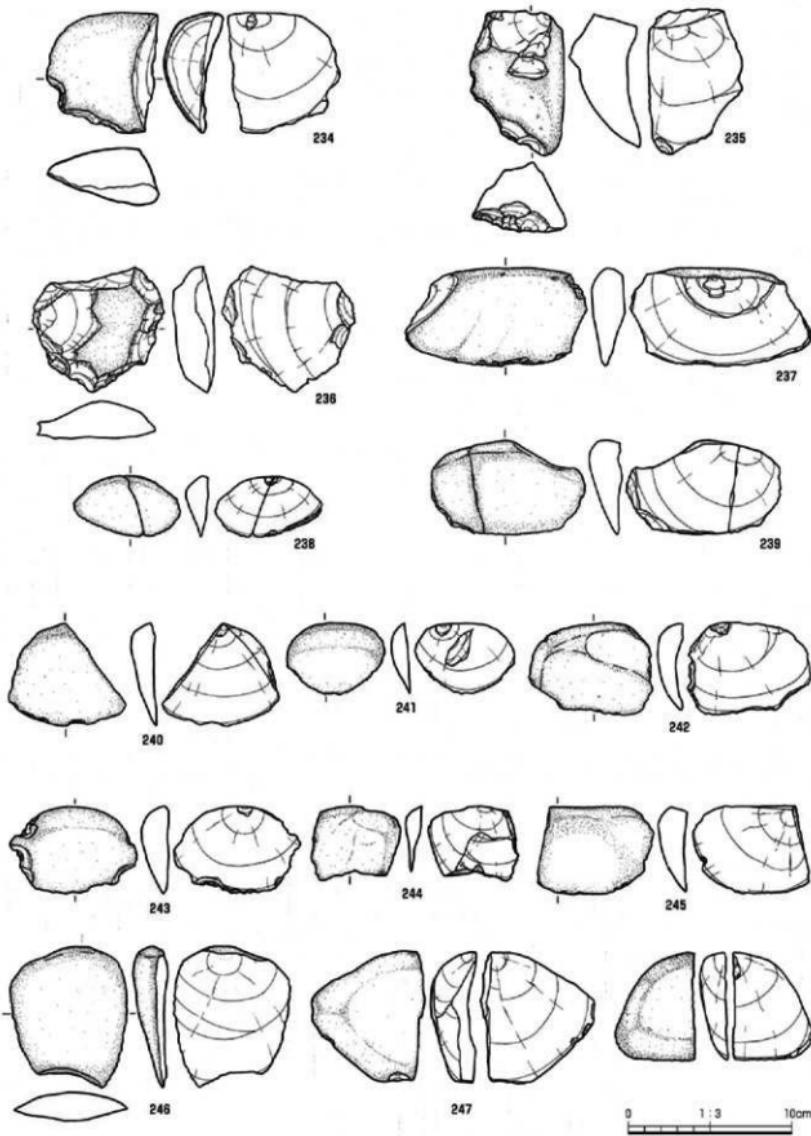
宮崎県埋蔵文化財センター2002「蔽石村遺跡」「宮崎県埋蔵文化財発掘調査報告書」第53集



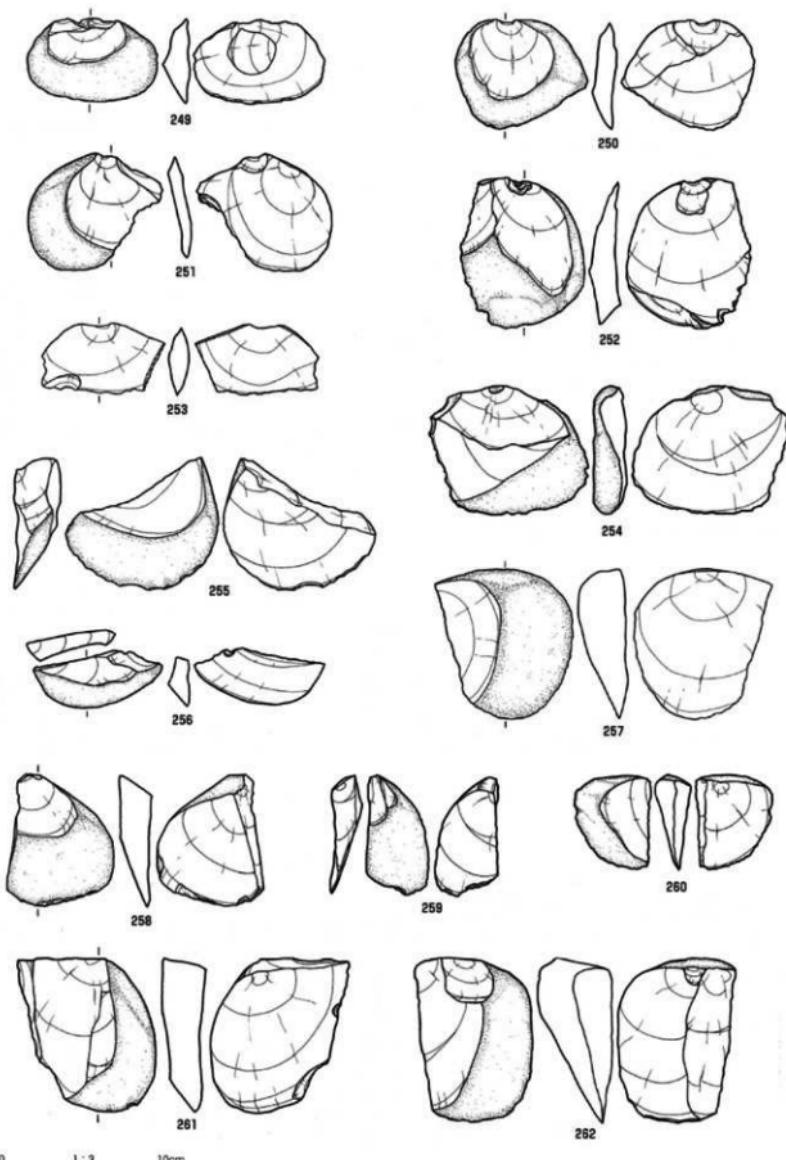
第28図 石器分布図(1/400)



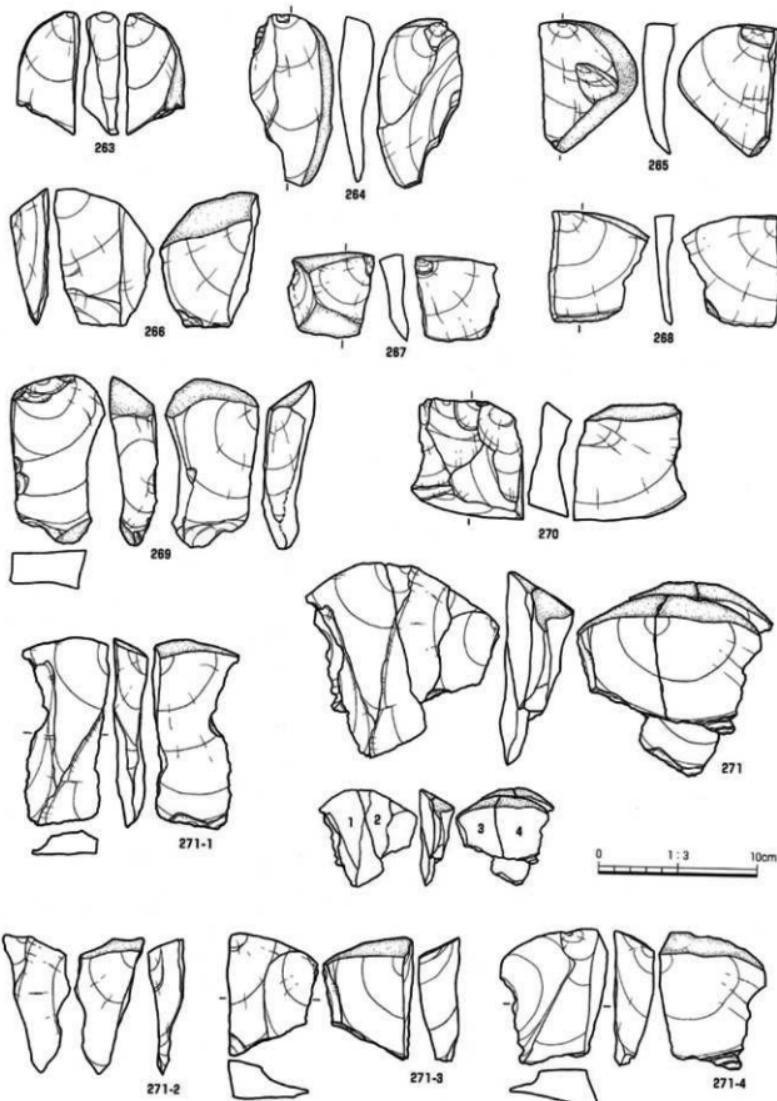
第29図 石器 實測図 (2/3・1/3)



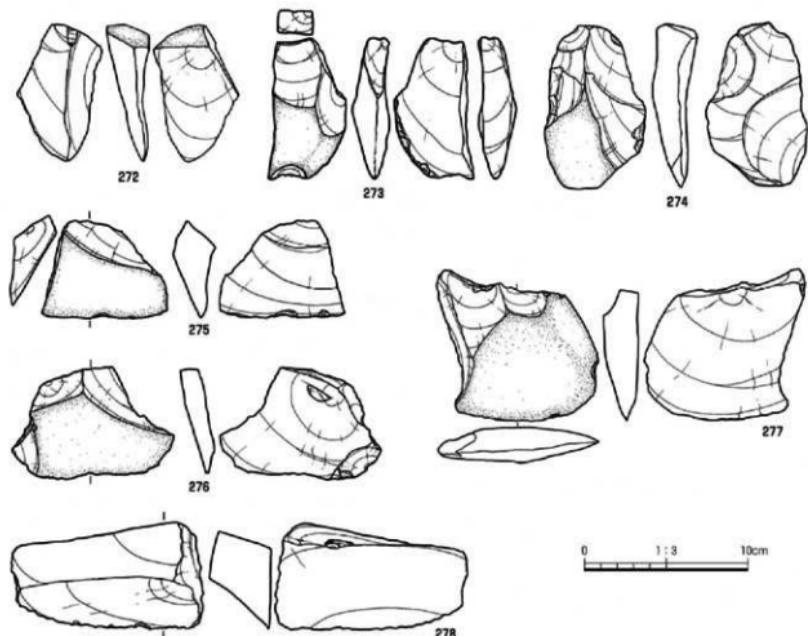
第30図 石器 實測図(1/3)



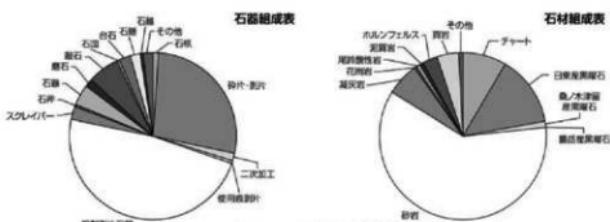
第31図 石器 實測図(1/3)



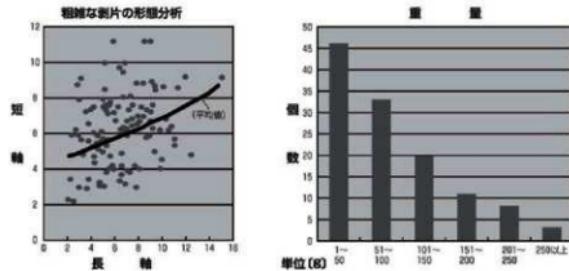
第32図 石器 察測図(1/3)



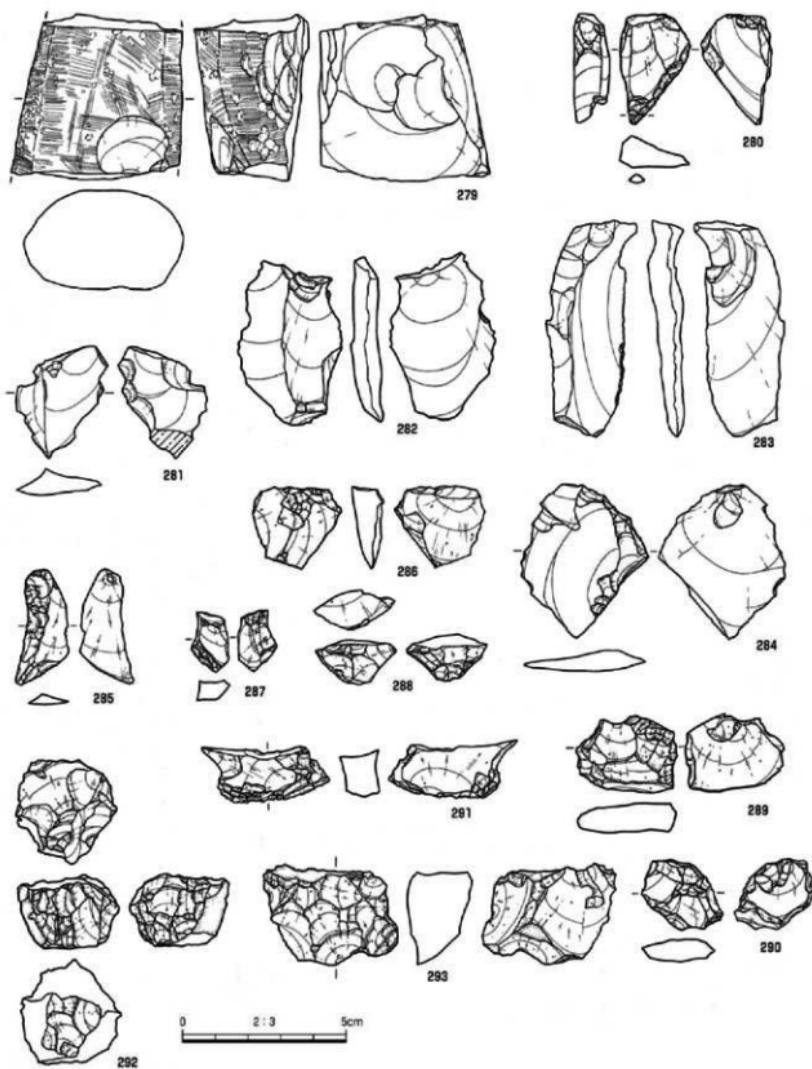
第33図 石器 実測図(1/3)



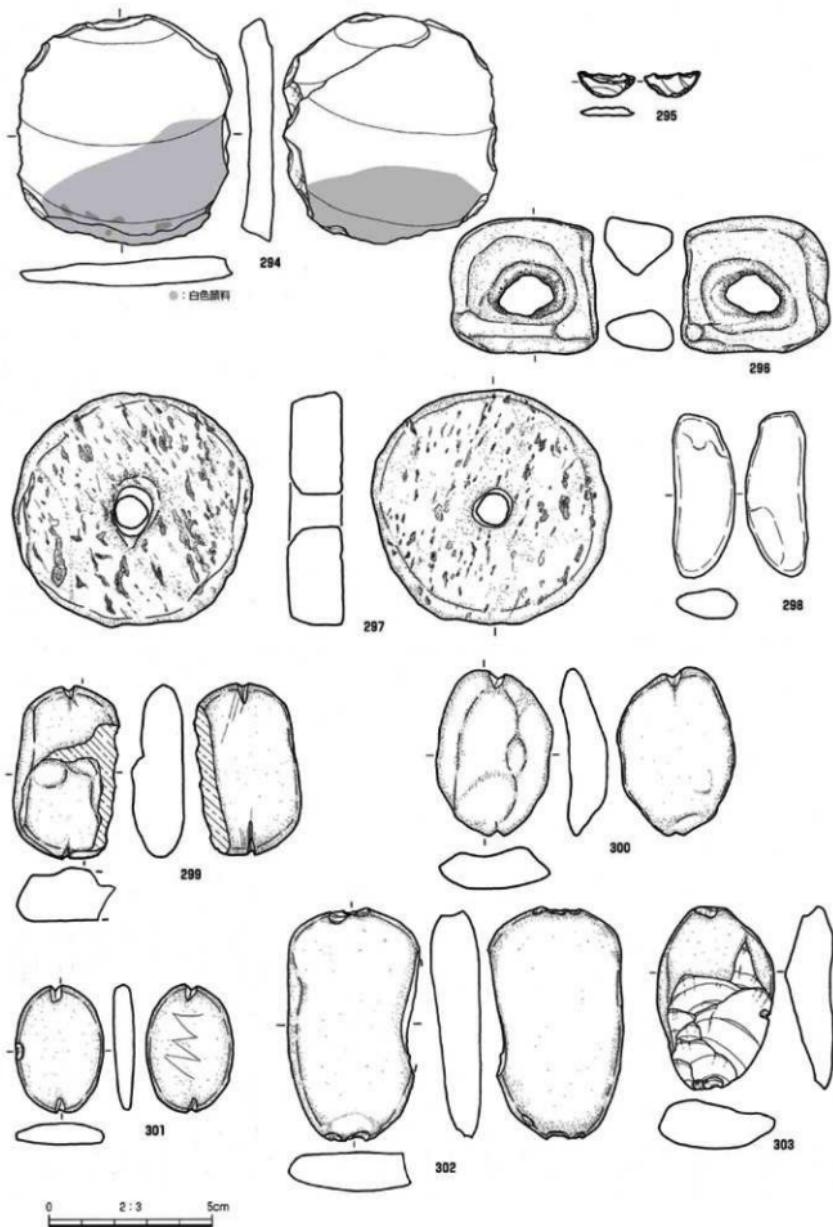
グラフ1 石器・石材組成



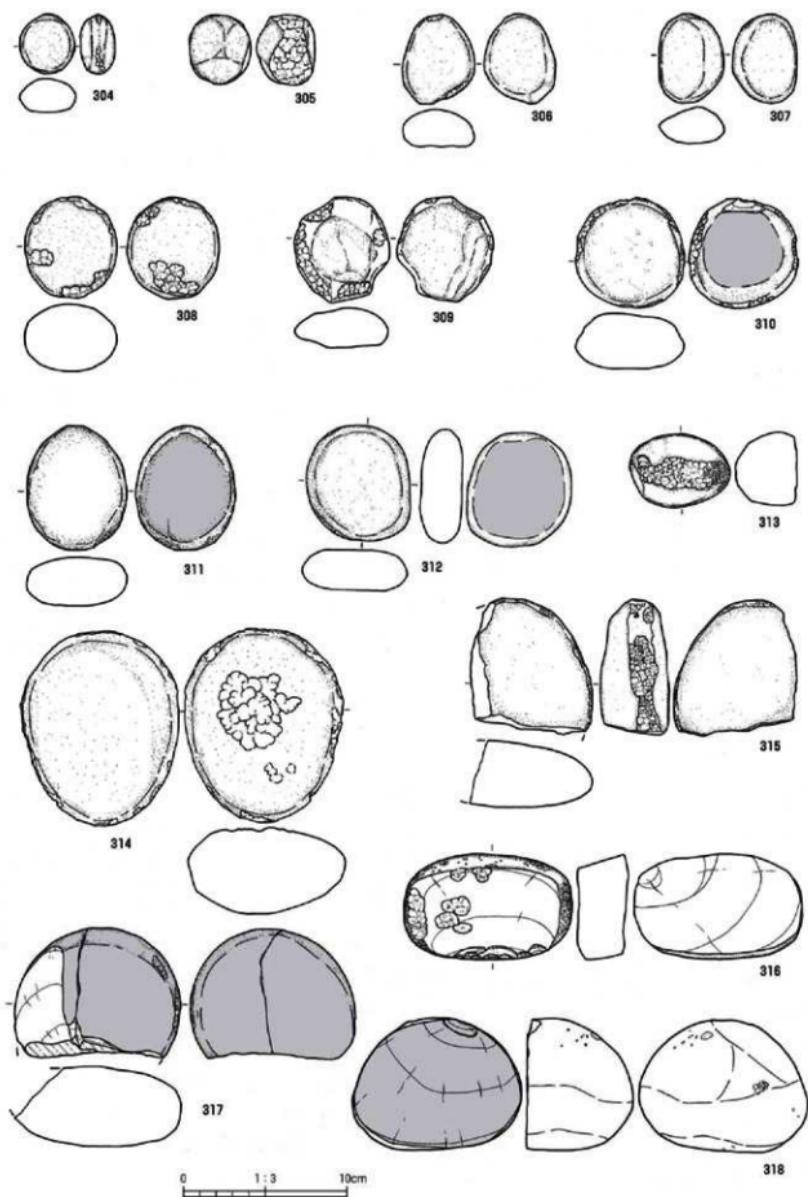
グラフ2 精製削片石器の形態分析・重量表



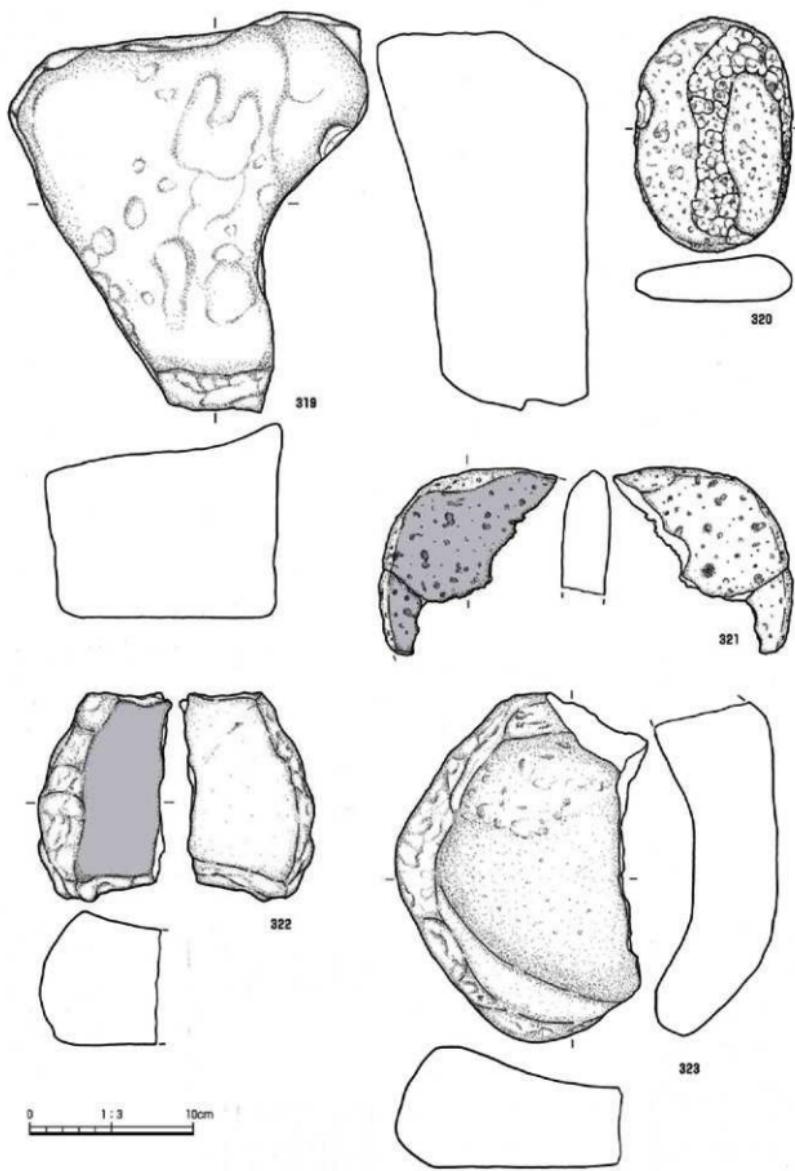
第34図 石器 実測図(2/3)



第35図 石器 實測図(2/3)



第36図 石器 實測図(1/3)



第37図 石器 實測図(1/3)

YMa

各部		Co	Ch-F	Re	UF	Rf	An	S	Ax	Dr	SW-Hs	Gs	An	GS	St	Total
Ch		1														5
ch(n)		2														2
ch(kw)																1
ch(kn)																
Sn																
Tu																
Gr																
Os																
Mu																
Hr																
Sh		1														1
金																
Total		4	9	4												16

各部		Co	Ch-F	Re	UF	Rf	An	S	Ax	Dr	SW-Hs	Gs	An	GS	St	Total
Ch		6														6
ch(n)		2	9	1	2											14
ch(kw)		7														8
ch(kn)																1
Sn		3		83		3					1	2	2			74
Tu		1		1							6	1				9
Gr											1					1
Os																
Mu																1
Hr																1
Sh		1		1		1	2									6
金																1
Total		2	27	1	2	94	3	4	1	2	1	11	3	2		123

番号	種類	石材	出土地点	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(cm)
271-2	調査	Sa	Vl	8.7	435	23	50
271-3	調査	Sa	Vl-延	7.7	575	26	114.8
271-4	調査	Sa	Vb	8.5	628	26	116.0
272	調査	Sa	Vl	8.5	508	26	67.7
273	調査	Sa	Vl-延	6.8	46	2.3	94.1
274	調査	Sa	Vl-延	18.8	6.2	2.8	123.7
275	調査	Sa	Va	6	7.7	2.6	86
276	調査	Sa	Vl	6.9	937	21	97.6
277	調査	Sa	Vl	9.24	987	22	201.5
278	調査	Tu	Vl	8.05	11.1	2.8	202.5
279	調査	Tu	Vl-延	5.55	11.1	2.8	130.0
280	石器	Sh	Vl	3.3	218	11	6
281	調査	Ch	M-延	3.03	28	6.8	6
282	調査	Ch	Va	5.00	32	6.9	11.2
283	調査	Sa	Vb	6.57	23	1.1	14.6
284	調査	Ch	-延	4.65	38	6.0	103.3
285	二次加工調査	Otbo	Va	2.5	162	6.3	1.3
286	調査	Otbo	Va	2.5	237	6.3	8.1
287	調査	Otbo	Vl	1.84	1.5	0.6	6.6
288	二次加工調査	Otbo	Vb	1.4	24.8	1.1	28
289	調査	Otbo	M	2.4	2.57	0.9	5.4
290	二次加工調査	Otbo	Vb	2.13	2.5	0.72	3.5
291	石核	Otbo	Vb	1.7	139	12	21
292	石核	Otbo	M	2.25	31	3.4	21
293	石核	Ch	M	1.1	41	10.0	10.0
294	円形状石器	Tu	Vb	7.93	6.54	1	63.6
295	異形石器	Ob	Vb	0.8	17.2	0.2	0.2
296	有乳石器皿	Hr	M	3.57	6.07	22	128.6
297	有乳石器皿	Pu	M	0.8	9.7	2.3	63.9
298	ペーストマーク	Ch	M-延	0.5	1.9	0.9	13.5
299	石核	Hr	Vb	5.3	13.0	1.6	36.0
300	石核	Hr	Vb	3.1	34	1.6	24.9
301	石核	Sh	Vl	3.89	27	10.6	10.6
302	石核	Sh	V-延	7.1	4.15	1.5	56
303	石核	Sh	M	5.59	3.63	1.5	36.6
304	磨石	Gr	Vl	3.60	335	2.12	37.7
305	磨石	Tu	Vb	4.25	375	3.6	81.8
306	磨石	Sa	Vb	3.55	4.42	1.6	10.0
307	磨石	Mu	V-延	5.05	405	2.1	61.1
308	磨石	Tu	Vb	6.28	57	4.1	158.5
309	磨石	Sa	Vl	6.10	5.9	2.4	108.5
310	磨石-骨器	Tu	Vl	6.73	6.7	3.4	202.6
311	石核	Sa	M	7.6	6.15	3	19.6
312	磨石-骨石	Sa	Vb	7.93	6.5	2.5	186.6
313	磨石-骨石	Hr	M	4.10	4.1	1.6	16.0
314	磨石	Tu	M	11.0	8.75	5.5	70.8.3
315	磨石	Tu	M	8.27	7.57	4.2	318.9
316	磨石	Sa	Vb	6.49	10.35	3.2	382.1
317	磨石	Os	Vb	7.93	102.9	4.9	594.4
318	磨石	Sa	M-延	8.13	102	6.5	774.5
319	白石	Sa	Va	32.85	29.5	17.2	18800
320	白石	Sa	V-延	19.2	37	10.5	37.054
321	白石	Tu	Vb	15.5	14.7	10.5	20.0
322	白石	Tu	Vb	17.4	10.95	10.9	3000
323	白石	Tu	Vb	26.7	26	10	3240

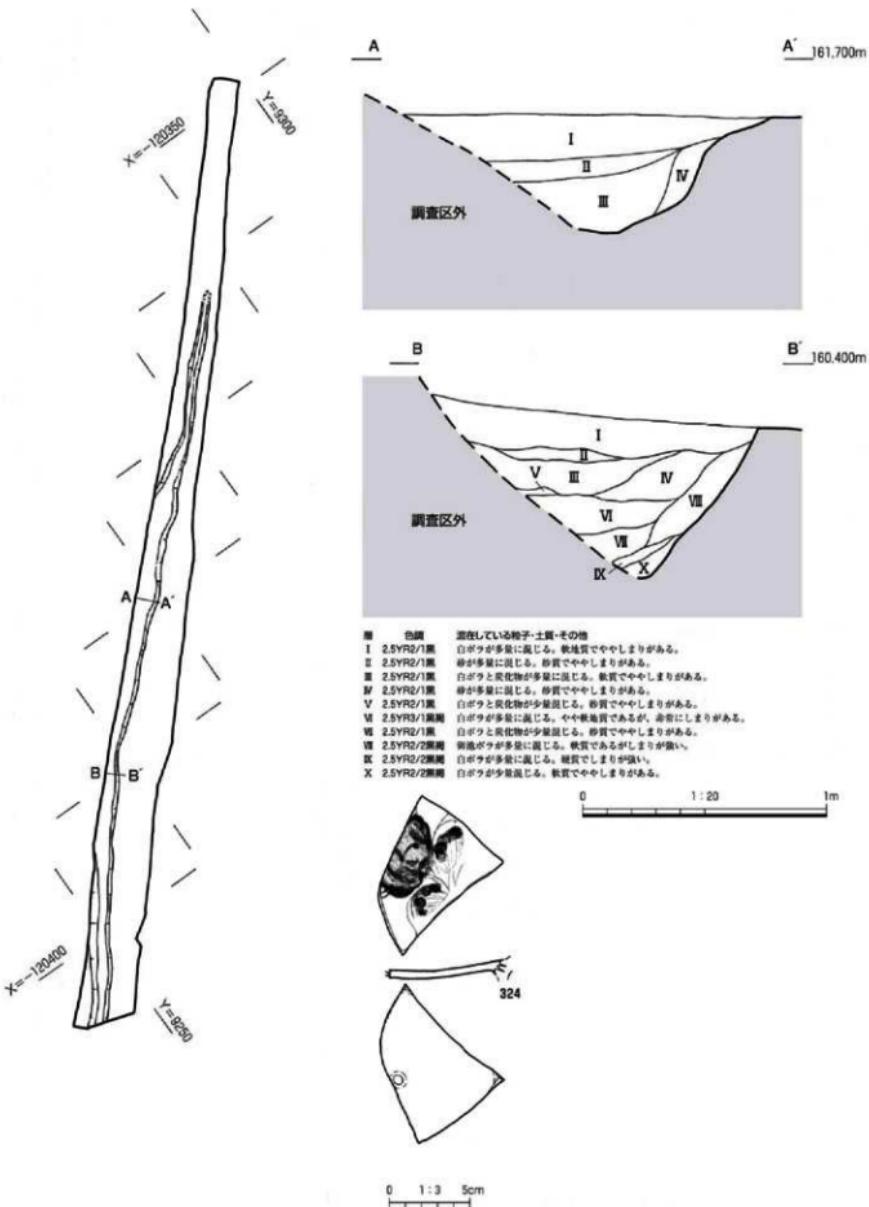
100

G I N	Co	Ch	Re	Uf	RF	An	S	Ax	Dr	SW/Hs	Ge	An	QG	Itt	Total
															14
Ch		5													5
sh(n)	1	7	2												10
sh(kw)	5														6
sh(hs)															
Sa	3		31			2		1	1	2					40
Tu											2	1	1	1	5
Or											2				2
Mu															
Hr	2									1					3
Sis								1							1
B								1							1
Total	1	22	2	31	3	2		2	3	4	1	1	2		74

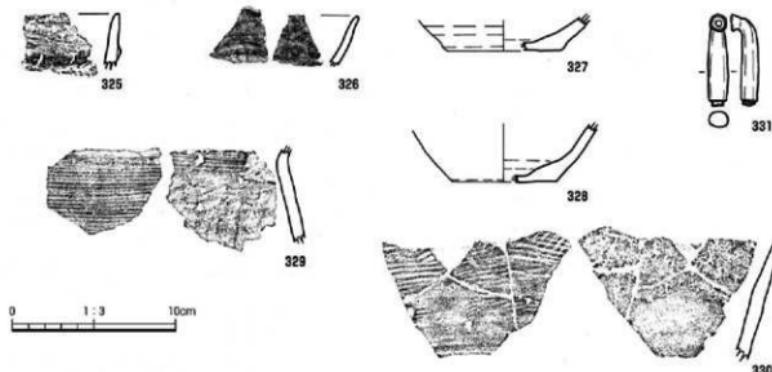
一九

Co:石核 Ch:碎片 F:剥片 Re:二次加工剥片 UF:使用痕剥片 RP:粗裂剥片  
 Ah:石器 S:スクレイパー Ax:石斧 Dr:石鑿 SW:石錐 Os:敲石 Hd:磨石  
 Ds:台面 Ag:刮削

第6表 石器觀察表・石器計測表



第38図 IV層検出溝状遺構及び出土遺物(1/400)



第39図 弥生時代以降の遺物実測図(1/3)

## 第2節 弥生時代以降の遺構と遺物

本遺跡では、IV層上面において少数ではあるが弥生時代以降の遺構と遺物が確認されている。

### 1 近世の遺構と遺物

#### 溝状遺構 (SE 1)

SE 1は、調査区内で遺構全体を検出していないので遺構の全体像は明確ではないが、検出した状況からは長さ61m以上、最大幅2m、最大深度75cmの形態を呈している。全掘できていないが埋土は基本土層第II層に由来するもので構成されていた。

遺構内の出土遺物の324は、肥前系の染付皿である。底部高台内中央に針支えの跡が残る。内面には牡丹と考えられる花文をあしらう。呉須の発色も良好であり、上手である。江戸時代後半として概ね捉えておきたい。また、遺構の廃棄時期もこれに準ずる年代が想定される。

### 2 弥生時代以降の遺物 (第40図 325~331)

325は、壺で口縁部下位に突帯を貼り付け刻みを施している。弥生から古墳時代に相当すると考えられる。326~328は、土師器の壺である。3点とも内外面に丁寧なナデを施す。327・328は、ヘラ切りの底部である。329・330は、土師器の壺である。329は、内面調整が頭部下位の削りと上位のハケ目で明瞭に分かれる。330は、底部付近にあたり外面にハケ目と土器片上位にタタキが見られる。これら土師器は形態から概ね9世紀後半~10世紀に相当すると考えられる。331は、近世のキセルである。

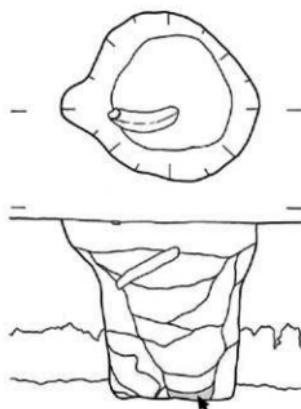
## 第IV章 自然科学分析

### 第1節 フローテーションについて

本遺跡の土坑(SC1)の埋土について遺構の性格的位置づけを行うためにフローテーション作業を行った。以下、その結果について説明を行い、作業記録については別表を参照されたい。

作業項目	作業の記録
埋土サンプリング	平成17年8月9日アルミホイルで包んだ移植ゴテを用いてSC1 X層壁上の表面直上の土を土の袋に詰めた。 サンプルは土の袋1袋分であった。
保存状況	土の袋内に入れた状態で約1年間放置していた。平成18年7月に通気性のよい網状のコンテナにいれ乾燥させた。
本次作業	
・対象埋土重量	12.2g(土の袋1袋)
・作業日時	平成18年7月25日 午前中
・作業員数	2名(整理作業員) + 1名(調査員)
・作業器具	簡易フローテーション(2mm-1mm-0.45mm)を使用) 火山灰混じりの黒色土層でサラサクしている。水に溶けやすい
・作業状の留意点	浮いてくる炭化物をよく取る。各メッシュを段階的に使用してそれぞれ側面に選別する。
選別作業と結果	
・選別作業	1名(調査員)半日・大まかに筆で選別した後、実際鋼鉄錠を用いて2次選別
・検出内容	木の芽1点・炭化材・木の根

第7表 フローテーション作業内容



第40図 埋土サンプリング箇所

#### 【作業の結果】

目的としていた炭化種子等の検出には至らず、土坑を貯蔵穴や廃棄土坑とする仮説については、可能性は低いとする結論を得た。土坑の位置づけについて有益な情報はないが、調査方法のプロセスは結論と同様に重要な情報と考え記載することとした。また、条件(網目の単位等)を揃えることで低コストの簡易フローテーションでも精度に問題はなかったと考えられる。



【簡易フローテーション 作業風景】

#### 【第1節・第2節 参考文献】

- 松井章2000「遺墳考古学(遺跡土壤の選別法)」「埋蔵文化財ニュース」95奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター  
安藤広道2006「先史時代の種子遺体・土器圧痕の分析をめぐる覚書」「西相模考古」第15号  
黒尾和久・高瀬克範「縄文・弥生時代の雜穀栽培」「雜穀一畝作農耕論の地平ー」青木書店  
宮崎県埋蔵文化財センター2006「向原第1遺跡」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第119集  
宮崎県埋蔵文化財センター2006「フローテーション作業と成果」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第131集  
丑野毅・田川裕美1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」「考古学と自然科学」1324日本文化材保存学会  
小畑弘巳2006「古民族植物学研究法と東北アジアの穀物栽培」「宮崎県埋蔵文化財担当専門職員研修会発表資料」  
比佐陽一郎・片多雅樹2005「土器圧痕のレプリカ法による転写作業」福岡市埋蔵文化財センター  
福岡市埋蔵文化財センター2006「付)土器圧痕レプリカ法作業の手引き」「福岡市埋蔵文化財センター年報」第25号  
柳田裕三2006「宮崎県内出土の種子圧痕」「第3回古代種子研究会」  
山崎純男・片多雅樹2006「附篇:長崎県肥前太郎遺跡における土器圧痕の検討」「長崎県文化財調査報告書」第189集  
山崎純男2005「土器圧痕からみた食と生業」「土器研究の新視点」土器の技術・調理研究会

## 第2節 吉牟田遺跡の圧痕土器について

本遺跡で出土した縄文土器総数3,502点中何らかの圧痕がある土器を77点を掲載した（第9表）。以下、観察の結果について説明を行い、作業記録については別表を参照されたい。

作業項目	作業の記録
第一次選別と観察	整理作業における水洗・注記・接合・土器計測・掲載物の選別時(約2ヶ月)に総点数3,502点から圧痕のあるものを肉眼観察で選別した。はじめ凹みのあるものについて整理作業員に注意を払うよう指示し、可能性のある土器片を抽出した。その後、それらを実体顕微鏡(Nikon×40×-スコープ・77-78)により20倍の倍率で観察し識別した。岩石や火山灰等の含有物が抜け落ちたものではないと想定した約800点程度を抽出した。
第二次選別と観察	山崎純男氏(福岡市教育委員会)に一次選別で抽出した土器の選別を再度お願いした。第一次選別で抽出した圧痕土器を実体顕微鏡(Nikon)により20倍の倍率で観察し識別した(平成17年7月20日～22日)。結果、2点について種子圧痕として指摘を受けた。その後、識別不明な資料や木片の圧痕を含む特徴的な資料を77点抽出した。
遺物の観察と記録	抽出した77点の圧痕について観察と記録を行った。観察は、主に10～63倍まで行える実体顕微鏡(Nikon pxF)を用い、記録は先ず実体顕微鏡での観察を行い、撮影はデジタルカメラを装着させ簡易記録を行った。その後、特定の資料のみレプリカ法により電子顕微鏡(HITACHI S-3000N)での観察を行った。レプリカ法については、片多雅樹・比佐陽一郎両氏(福岡市埋蔵文化財センター)に事前指導を受け、筆者がレプリカ作成を宮崎県埋蔵文化財センターにて行い走査電子顕微鏡(SEM)の観察を宮崎県総合農業試験場にて行った。なお、レプリカに使用した溶剤や手順については山崎・片多・比佐三氏の論考を参照されたい。また、詳細な観察状況は観察表を参照されたい。

第8表 圧痕土器探査の作業記録

### 【観察の結果】(第9表参照)

観察の結果、種子以外の圧痕の土器を含めて抽出した総数77点中、検出部位は胴部59点、口縁部12点、底部5点、円盤形土製品1点で確認された。種子圧痕とした種子は、雑草系の種子と考えられる。その他、稚貝の巻貝、植物の子葉や木片、植物繊維状の圧痕も多数確認された。今回検出した種々の圧痕は、同定作業において困難な点が多いためこれ以上の考察は差し控えたい。

### 【成果と課題】

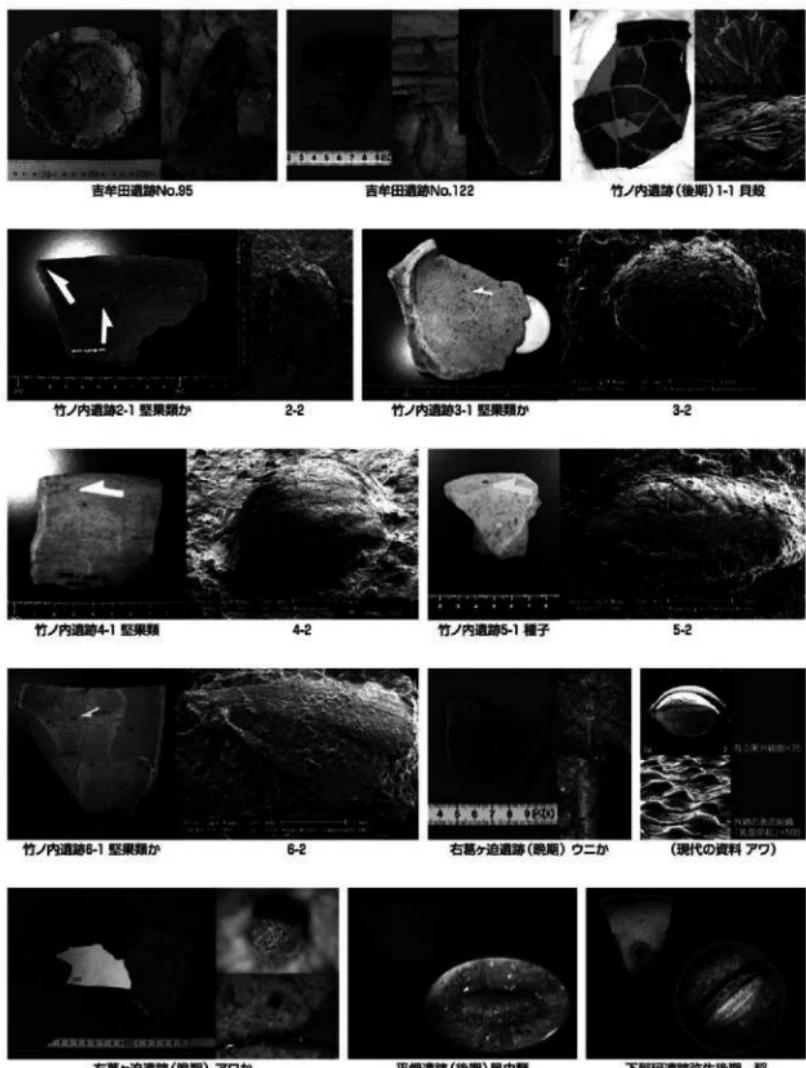
台地上の遺跡における動植物遺体の復元を行えたことが、最大の成果であったと考える。これらの復元された種子圧痕や稚貝の巻貝により、周辺の環境や土器製作用の粘土獲得に関する新たな情報を蓄積することが可能となった。これらは、通常の土器型式の認定による遺跡の年代決定作業や計測等による土器使用に関する整理からは導き出せない情報であり、今後とも積極的に作業を進める必要があろう。

また、圧痕を探し出す作業についても、水洗から接合までの整理作業間に行うのが最も有効であることも分かり、今後効率的な作業方法を導き出すことが期待できる。さらに、調査指導においてこれまで報告された資料や未報告資料の中にも多くの圧痕資料を検出することができた。これは吉牟田遺跡において本来ならば未掲載となる小片の土器の中から貴重な資料が拾い上げられたことともリンクするが、再度未報告資料を含めた資料の見直しと1点1点の土器に対する入念な探査、新視点からの整理・研究が必要であることを示している。今後とも同定作業と同様に地道な資料の蓄積に努めていきたい。

第9表 斜痕土器觀察表



吉牟田遺跡出土の圧痕土器



\*竹ノ内遺跡は柏原市埋蔵文化センター片多雅樹氏のSEM撮影による。その他の遺跡は、宮崎県埋蔵文化センターにて筆者が実際顕微鏡撮影を行った。なお、右葛ヶ迫遺跡のアワカは山崎氏の調査指導時の発見によるもので、他は筆者の資料調査による。

#### 圧痕土器関連資料（宮崎県内の圧痕土器）

### 第3節 岩化種実の同定及び放射性炭素年代測定・土器付着物の蛍光X線分析について 吉牟田遺跡における自然化学分析について

株式会社 古環境研究所

#### I. 放射性炭素年代測定

##### 1. はじめに

放射性炭素年代測定は、生物体内に含まれる放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度には変動が認められ、年代測定結果に影響していることから、年輪年代学などの成果を利用して較正曲線により  $^{14}\text{C}$  年代から曆年代に較正する必要がある。

##### 2. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	VI-631	岩化種実 (コナラ属子葉)	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

AMS : 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

##### 3. 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	$^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	曆年代 (西暦) ( $1\sigma$ : 68%確率, $2\sigma$ : 95%確率)
No. 1	220205	$3400 \pm 40$	-22.6	$3440 \pm 40$	交点: cal BC 1740 $1\sigma$ : cal BC 1760-1690 $2\sigma$ : cal BC 1880-1650

##### (1) $^{14}\text{C}$ 年代測定値

試料の  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$  の半減期は国際的慣例により Libby の 5,568 年を使用した (実際の半減期は 5730 年)。BP は Before Physics の略。

##### (2) $\delta^{14}\text{C}$ 測定値

試料の測定  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比を補正するための炭素安定同位体比 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

##### (3) 補正 $^{14}\text{C}$ 年代値

$\delta^{13}\text{C}$  測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料の  $\delta^{13}\text{C}$  値を -25 (‰) に標準化することによって得られる年代である。

#### (4) 历年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中<sup>14</sup>C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。callはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の<sup>14</sup>Cの詳細な測定値およびサンゴのU-Th年代と<sup>14</sup>C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

曆年代の交点とは、補正<sup>14</sup>C年代値と較正曲線との交点の曆年代値を意味する。 $1\sigma$  (68%確率) と  $2\sigma$  (95%確率) は、補正<sup>14</sup>C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の $1\sigma$ ・ $2\sigma$ 値が表記される場合もある。

#### 4. 所見

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、VI-631から出土した炭化種実(コナラ扁子葉)では、 $3440 \pm 40$ BP ( $1\sigma$ の曆年代でBC1760~1690年)の年代値が得られた。

#### 文献

Sluiver et al. (1998). INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration. Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

中村俊夫 (1999) 放射性炭素法、考古学のための年代測定学入門。古今書院, p.1-36.

#### 吉牟田遺跡の炭化種実



1 コナラ扁子葉

2 同左

— 1.0mm —

# CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-22.6; lab. mult=1)

Laboratory number: Beta-220205

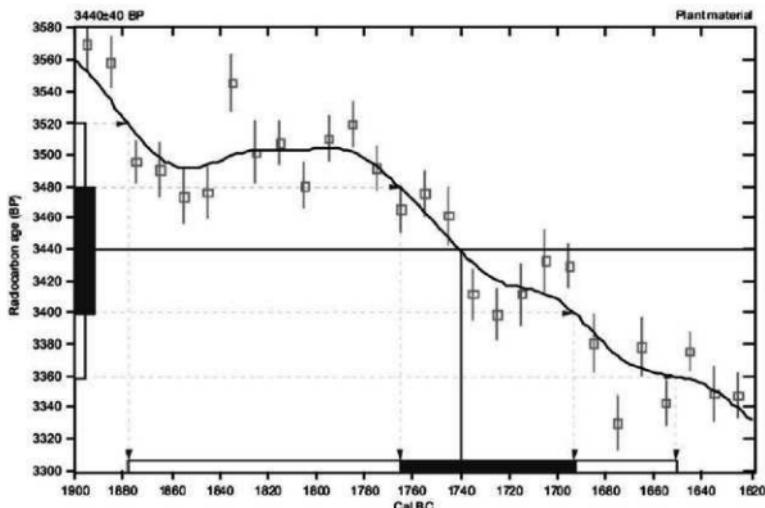
Conventional radiocarbon age: 3440±40 BP

2 Sigma calibrated result: Cal BC 1880 to 1650 (Cal BP 3830 to 3600)  
(95% probability)

## Intercept data

Intercept of radiocarbon age  
with calibration curve: Cal BC 1740 (Cal BP 3690)

1 Sigma calibrated result: Cal BC 1760 to 1690 (Cal BP 3720 to 3640)  
(68% probability)



## References:

### Database used

INTCAL98

### Calibration Database

### Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-sili

### INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et. al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

### Mathematics

### A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

## Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

## II. 炭化種実同定

### 1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

### 2. 試料

試料は、VI層包含層（SC 1、VI-631）から選別採取された炭化種子である。

### 3. 方法

肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

### 4. 結果

#### (1) 分類群

分析の結果、樹木1分類群が同定された。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

コナラ属 *Quercus* 子葉（半形） ブナ科

黒褐色で梢円形を呈し、表面は平滑で発泡している部分もある。殻斗が欠落し、堅果の内部の子葉が炭化したものである。著しく発泡して表面模様が観察できないことから、属レベルの同定にとどめた。

#### (2) 種実群集の特徴

6層SC 1の試料では、芽1、材片1が同定された。VI-631の試料では、コナラ属子葉の半形1が同定された。

### 5. 考察

VI-631の試料はコナラ属と同定された。堅果の中の子葉のみが炭化して残存したものであり、発泡していることから火を受けたと考えられる。コナラ属の堅果を食用にするには、イチイガシ以外はあく抜きが必要である。本試料は、発泡が著しく表面模様が観察できないが、形状がやや四角いことから、イチイガシの可能性が考えられる。

### 文献

- 南木睦彦（1992）低湿地遺跡の種実. 月刊考古学ジャーナルNo.355, ニューサイエンス社, p.18-22.  
南木睦彦（1993）葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p.276-283.  
渡辺誠（1975）縄文時代の植物食. 雄山閣, 187p.

### III. 蛍光X線分析

#### 1. はじめに

物質にX線を照射すると、その物質を構成している元素に固有のエネルギー（蛍光X線）が放出され、この蛍光X線を分光して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類と量を調べることができる。

#### 2. 試料

分析試料は、VI層から出土した2点の縄文土器（VI-1387、VI-788）である。このうち、VI-1387には赤色顔料、VI-788には白色物質が付着している。VI-1387については赤色部と非赤色部、VI-788については白色部と非白色部の2箇所を測定して比較検討を行った。なお、正確を期すために、赤色部と白色部については粘着テープで微量を採取して追加測定を行った。この粘着テープの構成元素は99.8%が炭素であり、鉄、水銀、鉛などは含まれていない。

#### 3. 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析装置（日本電子（株）製、JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンデメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。測定の条件は、測定時間600秒、照射径7.0mm、電圧30kV、試料室内真空中である。

#### 4. 分析結果

表1に各元素の定量分析結果(wt%)を示し、図1に主な元素の検出状況を示した。なお、測定結果は慣例により代表的な酸化物名で表記している。

#### 5. 考察

##### (1) 土器VI-1387（赤色顔料）

赤色顔料としては、一般的に水銀朱（硫化水銀：HgS）、ベンガラ（酸化第二鉄： $Fe_2O_3$ ）、鉛丹（酸化鉛： $Pb_2O_3$ ）が知られている（市毛、1998、本田、1995）。蛍光X線分析では、水銀（Hg）・イオウ（S）・鉄（Fe）・鉛（Pb）の元素の検出状況から赤色顔料の種類を推定することが可能である。

分析の結果、赤色顔料付着部分では鉄（Fe）の明瞭なピークが認められ、水銀（Hg）や鉛（Pb）は検出されなかった。鉄（ $Fe_2O_3$ ）の含量は9.3%（微量採取試料は12.7%）を示しており、非赤色部分の6.2%と比較して1.5倍（2.1倍）と明らかに高い値である。

以上の結果から、土器VI-1387に付着した赤色顔料はベンガラと考えられる。なお、地下水中などの鉄分が沈着した褐鉄鉱も同様の成分で構成されていることから、ベンガラのより確実な同定のためにはX線回折による結晶構造の解析が必要である。

##### (2) 土器VI-788（白色物質）

白色部分では、アルミニウム（Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）の含量が42.6%（微量採取試料は36.4%）、珪酸（SiO<sub>2</sub>）が41.9

% (47.6%)、鉄 ( $Fe_2O_3$ ) が7.5% (6.7%)、マグネシウム ( $MgO$ ) が2.6% (3.0%) を示しており、アルミニウムおよび珪酸が主成分となっている。非白色部分では、アルミニウム ( $Al_2O_3$ ) が30.2%、珪酸 ( $SiO_2$ ) が51.1%、鉄 ( $Fe_2O_3$ ) が11.3%、マグネシウム ( $MgO$ ) が0.6%であり、白色部分では非白色部分と比較してマグネシウムの含量が4.3倍 (5.0倍) と明らかに高い値となっている。

アルミニウムや珪酸を主成分としてマグネシウムが特徴的に含まれる白色系の物質としては、粘土鉱物のサボナイト（ケイ酸アルミニウム・マグネシウム）などが知られているが、土壤中に含まれるマグネシウム成分が結晶化して付着した可能性も考えられる。

文献

市毛 勲 (1998) 新版朱の考古学、考古学選書、雄山閣出版

本田光子 (1995) 古墳時代の赤色顔料、考古学と自然科学、31:32、p.63-79。

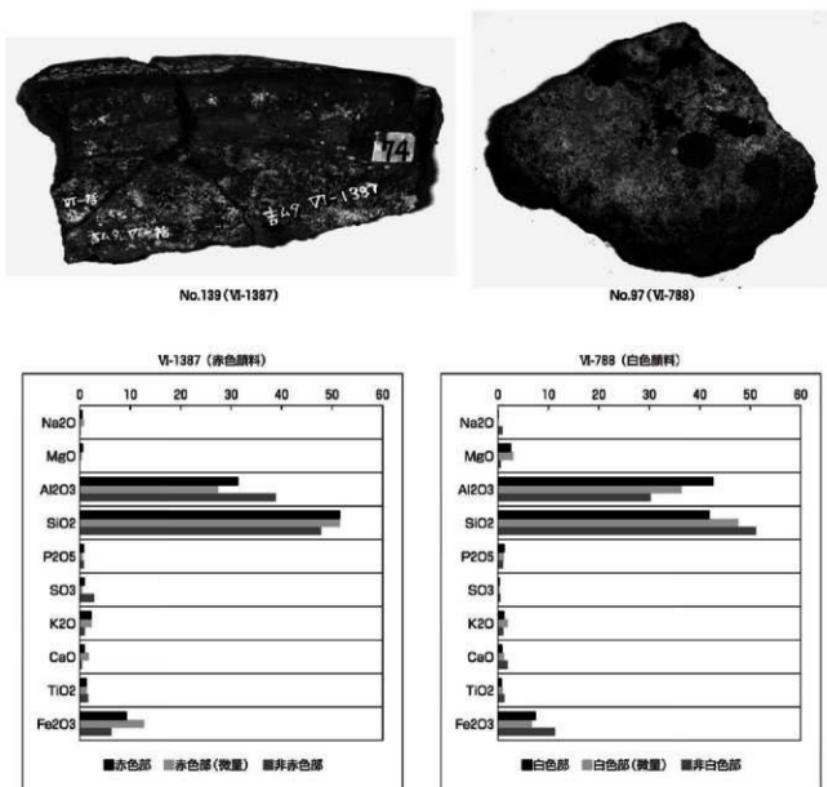


図1 吉牟田遺跡出土縄文土器の蛍光X線分析結果(wt%)

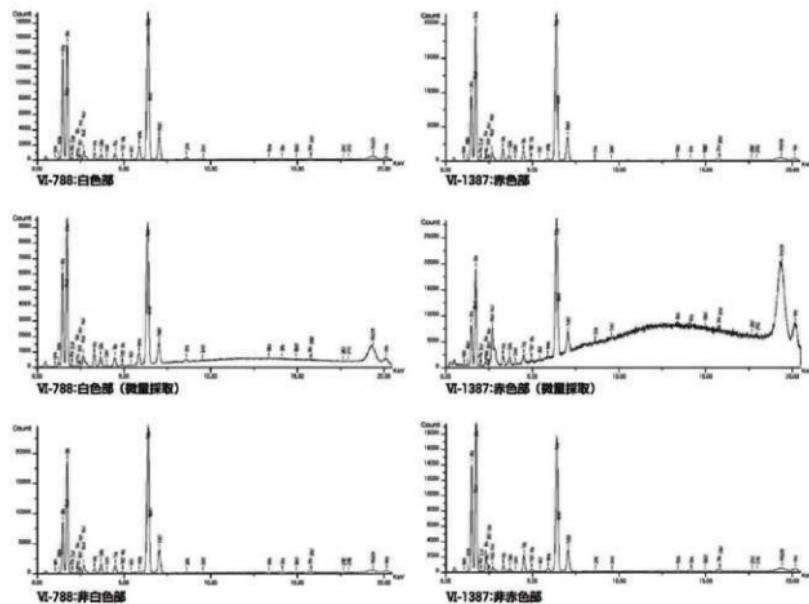


図2 吉牟田遺跡出土縄文土器の蛍光X線スペクトル図

表1 吉牟田遺跡出土縄文土器の蛍光X線分析結果

単位: wt(%)

原子No.	地点・試料 化学式	VI-1387 (赤色顔料)			VI-788 (白色顔料)		
		赤色部	赤色部※	非赤色部	白色部	白色部※	非白色部
11	Na <sub>2</sub> O	0.519	0.774	0.145	0.103	0.026	0.841
12	MgO	0.633	0.404	0.000	2.577	3.021	0.578
13	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	31.369	27.416	38.862	42.629	36.426	30.248
14	SiO <sub>2</sub>	51.577	51.546	47.788	41.941	47.616	51.123
15	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.783	0.615	0.784	1.278	1.191	0.985
16	SO <sub>3</sub>	0.944	0.535	2.837	0.284	0.315	0.459
19	K <sub>2</sub> O	2.318	2.328	1.002	1.232	1.939	1.042
20	CaO	0.954	1.787	0.434	0.813	1.233	1.864
22	TiO <sub>2</sub>	1.302	1.382	1.642	0.734	0.879	1.249
23	V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.039	0.136	0.021	0.027	0.020	0.040
25	MnO	0.141	0.163	0.164	0.709	0.520	0.120
26	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	9.285	12.735	6.213	7.487	6.724	11.291
30	ZnO	0.030	0.124	0.025	0.097	0.077	0.043
37	Rb <sub>2</sub> O	0.024	0.000	0.016	0.020	0.007	0.018
38	SrO	0.021	0.000	0.019	0.024	0.002	0.036
40	ZrO <sub>2</sub>	0.063	0.055	0.047	0.046	0.003	0.063

※: 粘着テープで微量採取

## 第V章　まとめ

吉牟田遺跡は、縄文時代・弥生時代・古代・近世の遺構、遺物が確認されているが、割合的に多くの情報が得られる縄文時代の特筆すべき項目にのみ焦点を絞り、まとめにかえたい。

### ■土器編年

吉牟田遺跡縄文時代の開始時期は、1類土器とした指宿式期であり、その終焉は130の黒色磨研土器の晩期前半期である。開始と終焉の前後する時期は土器型式に断絶がみられるが貝殻文系土器の変遷は比較的スムーズである。また、「貝」と「縄」というシンボル的な文様をもつ二系統の併行関係は、明確な層位的状況は得られなかったものの、遺物量の計測から第VI層における市来式・丸尾式と北久根山式・納曾式の関係性は強く看取され、これまで構築されてきた編年観(本田1992・前追2004)を地理的関係性の中で補充する形となった。また、山間部の土器としてまとめた市来式系の2類・3類は、口縁部の肥厚形態から市来式の前後に相当すると考えられ、刺突や沈線といった単一の文様であることを考慮すれば市来式よりも前段階に位置づけられよう。

第I群と第II群については、個々に文様の類似性がみられ(市来式-149~151、丸尾式-189・190、丸尾式(64)-131~135、北久根山式-143~147、納曾式-153~157・191・192)、それぞれがセット関係を示すと考えられる。つまり、台付皿形土器は、深鉢形土器に付随する形で文様を取り込み変化していくと考えられる。これらの関係を含めた吉牟田遺跡での土器編年組列を第42図にて概略を提示しておく。

### ■土器製作と装飾に関わる「白」について

今回、土器製作と土器用途を考えるにあたり深鉢形土器の底部と台付皿形土器に付着する白色物に着目をした。

自然科学分析の結果、土器底部に付着していた白色物はサボナイトという土壤中に含まれるMgO成分が結晶化した可能性を指摘されている。つまり、白色粘土と捉えて差し支えないであろう。

結果とは異なったが今回の分析にあたり、ある一つの仮説を設定していた。それは、土器製作時の粘土と地面との離隔材としてこれらの白色物を地面に撒き土器を製作したのではないか、というものである。その成分については貝や獸骨等を粉碎したカルシウム分を仮定していた。これは、土器整理の際、土器底部圧痕の網代底には白色物の付着がなく、それ以外のナデ調整の底部にのみ付着していた点と円盤形石器(295)に白色物が付着していたことに着目したためである(第2表)。しかし、蛍光X線分析の結果は先述のとおりであった。仮説とは異なるものの、今回は基礎的なデータを提示したことで一定の成果としたい。ただ、本遺跡では網代底に付着しないが、本野原遺跡や竹ノ内遺跡等では網代底にも付着がみられており、遺跡間での相違も存在する。現在、縄文土器製作の敷物には底部の圧痕から網代や網布などの編み物のはか、植物の葉や鰯の脊椎骨などが利用されていることが分かっており、今後資料の蓄積とともに如何にしてこの白色物が底部にのみ付着するのか、その実態の把握に努めていきたい。稚拙な仮説も今後の分析材料の一つとして恥を忍び記述した次第である。

白色物は、台付皿形土器でも多く確認された。139の資料では白色物の上に蛍光X線分析で結果の得られたベンガラが塗彩されていた。この白色物の蛍光X線分析は行っていないが、鹿児島県干迫遺跡や中原遺跡の例からも白色粘土が有力候補であろう(鹿児島県埋文センター-1997)。台付皿形土器に白色塗彩を行なう行為は古くから認識されていた(瀬戸口1984)ものの、干迫遺跡での分析により白色顔料の塗彩が古墳後期から縄文時代後期まで遡ることが確認された。これまで縄文土器に塗彩される顔料は、赤・黒・白が確認されている。赤は「ベンガラ」と「朱」が知られており、「朱」の分布域及び使用方法は地域的偏差が看取されているが(成瀬1998)、全国的にみても白色顔料の土器は非常に珍しくその分布域や

時間軸も南九州の縄文後期土器に限定されよう。県内の状況をみても、西下本庄遺跡・大谷遺跡・竹ノ内遺跡に類似資料がみられ、県央から県南部にかけて存在している。今後、南九州の縄文塗彩の象徴的な色として積極的に分析していく必要がある。

また、土器観察から装飾のない無文土器にも顔料の塗彩が行われており、有文・無文に関係なく台付皿形土器の製作工程で行われているようである。また、白色は赤色をより際だたせる効果が観察されるが、「白」のみの塗彩もあり「白」自体に精神的意味合いを強く感じる。北部九州の台付皿形土器の実態を加味した上で、今後南九州の台付皿形土器に関する実態を解明する必要があろう。

### ■生業

出土遺物から推察される生業について触れてみたい。食料の獲得具としては、狩猟具の石鎌、漁獵具の石錐があげられる。石錐は、立地状況から周辺の河川にて漁獵活動が行われていたことが推察される。県内の土錐・石錐を集成した藤木論考によれば、上中流域の山間部には打欠石錐に対し小型の切目石錐あるいは土器片錐が卓越する傾向にある（藤木2003）というが、本遺跡も同様の傾向が看取された。さらに、伐採加工工具として磨製石斧が、食料加工工具として磨石・蔽石・台石・石皿・スクレイバーがみられる。磨石・石皿からは植物の粉碎作業が、スクレイバーからは食料解体作業が考えられる。また、使用痕やツブレのみられる粗製剥片石器についても、これらに類する使用方法が推察される。蔽石・台石については、出土しているトゥール類や剥片の石器製作作業が考えられる。

加工の対象となる食糧については、ドングリ(一位櫻か)が層位的・年代的に適合している点から堅果類を対象の一つとしてあげられよう。さらに、圧痕土器の中にも堅果類の可能性の高いものが多く存在している。土器に付着する点から身近な存在であったことがわかってくる。ドングリは從来の縄文時代の食糧の対象として馴染み深いものだが、実資料としてあげられる点は強い。また、出土した炭化種実のドングリが被熱を受けていた点は、植物加工の結果か自然現象によるものか断定できないが、いずれにしても興味深い現象である。

### ■総括

吉牟田遺跡では、土坑3基・竪穴状遺構1基・溝状遺構1条・ピット群が確認された。いずれの遺構も同時性を示す確証はないが、先述のとおり後期中葉～晚期初頭の時期に比定される。さらに型式幅のある多くの土器が急傾斜の南側に集中する堆積状況から、本遺跡は周辺に広がる緩斜面の同一台地上にこれらの遺物を使用したであろう人々の営みが想定され、そこで廃棄あるいは遺棄された遺物が地形的な要因により継続的に流れこんだ結果、形成された遺跡と考えられる。また、縄文土器の多寡から丸尾式の時期が最も大きい集落が周辺に展開していた可能性が高い。

これまで高原町では、爆発的な遺物量があるものの縄文時代の遺構が検出されていない。つまり、本遺跡は高原町における初めての縄文時代の遺構検出となり、これまで確認された遺跡における集落と土器集中区の関係を探る上で重要な意味をもつ。

近年、南九州の縄文後期の時期は本野原遺跡に代表されるような大規模な集落の存在もみられ、平畠遺跡や竹ノ内遺跡等これまで確認された遺跡もあわせ、その様相が解明されつつある。また、細井地区遺跡群においても内陣部における集落の様相を示す遺跡として注目される。こうした貝殻文系土器を用いる南九州縄文文化の潮流を背景に、今回、霧島連山の麓に位置する高原の地に営みを築いた縄文人の生活の一端を垣間見ることができた。まとめにあたり特筆される項目に対し諸課題を表明し、今後の周辺遺跡の調査・研究に資することができれば幸いである。

## 【主な参考文献】

- ・鹿児島県埋蔵文化財センター1997「干迫遺跡」「鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第22集
- ・鹿児島県埋蔵文化財センター2003「中原遺跡」「鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第54集
- ・高城町教育委員会2004「綱井地区遺跡群」「高城町文化財調査報告書」第14集
- ・高原町教育委員会2000「新粉山遺跡」「高原町文化財調査報告書」第6集
- ・高原町教育委員会1999「大谷遺跡表掲文土器資料」「高原町埋蔵文化財発掘調査報告書」第4集
- ・田野町教育委員会2004「本野原遺跡一」「田野町文化財調査報告書」第48集
- ・田野町教育委員会2005「本野原遺跡二」「田野町文化財調査報告書」第52集
- ・田野町教育委員会2006「本野原遺跡三」「宮崎市文化財調査報告書(田野町文化財調査報告書)」第53集
- ・宮崎県教育委員会1985「4. 包含層の遺物」「宮崎学園都市道路発掘調査報告書」第2集
- ・宮崎県教育委員会1985「1.貝殻文系土器群について」「宮崎学園都市道路発掘調査報告書」第2集
- ・宮崎県教育委員会1997「大谷遺跡」「宮崎県文化財調査報告書」第40集
- ・宮崎県埋蔵文化財センター1998「荒迫遺跡」「宮崎フリーウェイ工業団地造成事業に伴う発掘調査報告書」
- ・市毛徹1998「朱の考古学」「考古学選書」華山閣出版
- ・小畠弘己・板元紀乃・大坪志子2003「考古学者のためのドングリ識別法」「先史学・考古学論究」IV
- ・金丸武司2005「九州における縄文の大土工事」「南九州縄文通信」No16
- ・可見通宏2005「縄文土器の技術」考古学研究
- ・黒川忠広2005「南九州における縄文時代後期の舟形山縄文形土器について」「南九州縄文通信」No16
- ・佐原真1979「土器の用途と製作」「日本考古学に学ぶ」2有斐閣
- ・志賀智史・本田光子・成瀬正和2004「西求塚古墳出土の赤色顔料」「西求塚古墳発掘調査報告書」
- ・菅付和樹・岩永哲夫1985「日向考古資料Ⅱ」「宮崎県総合博物館」No11
- ・成瀬正和1998「佃遺跡から出土した赤色顔料関係遺物」「佃遺跡」兵庫県文化財調査報告書第176番
- ・藤木聯 2003「宮崎県域の鍊具の変遷の分布」「考古学研究室創設30周年記念論文集 先史学・考古学論究Ⅳ」龍田考古会
- ・本田道輝1989「市来・一溝式土器様式」「縄文土器大観」第4巻
- ・本田道輝1992「南東と市来式土器」「奄美学術調査記念論文」南日本文化研究所叢書18
- ・林潤也2002「北久根山式をめぐる諸問題」「犬飼徹先生古希記念論集」
- ・前追亮一1992「異形統土器文化の一接点～南九州における縄文時代後期中葉の一様相：丸尾式土器の提倡～」「南九州縄文通信」No.6
- ・前追亮一1996「台付皿形土器の研究に関する覚書」「大河」第6号
- ・前追亮一2002「南の磨消縄文土器」「犬飼徹先生古希記念論集」
- ・前追亮一・水ノ江和同2001「九州地方南部における縄文時代集落の諸様相」「列島における縄文時代集落の諸問題」
- ・水ノ江和同1993「九州の縄文土器～九州における縄文後期前・中葉期土器研究の現状と課題～」「古文化談叢」30(上)
- ・水ノ江和同1997「北部九州の縄文後・晚期土器～三万田式から刻目安唇文土器の直前まで～」「縄文時代」第8号
- ・水ノ江和同2001「九州北部における縄文時代集落の様相」「列島における縄文時代集落の諸様相」
- ・水ノ江和同2002「九州の縄文集落」「犬飼徹先生古希記念論集」
- ・水ノ江和同2005「九州の縄文後期集落」「西日本縄文文化の特徴」
- ・横手浩二郎1994「宮崎県西諸県郡高原町大谷遺跡表掲の縄文土器I～松岡洋一氏コレクションの紹介～」「南九州縄文通信」No.8

型式	貝殻文系土器	台付凹形土器	磨消縞文系土器	型式
指宿式				
				上小池原式
				鐵縞式
				御手洗C
市来式				白須タブ
草野式				浜ノ州タブ
台付凹形土器				北久根止式
丸尾式				台付凹形土器
猪崎タイプ				納曾式
				辛川式
晩期				西平式
				高坏
				晩期

第41図 吉牟田遺跡出土縞文土器の編年組列



吉牟田遺跡 遠景



調査区 全景



第Vb層遺物出土狀況



近世溝状遺構完掘状況



第Vb層遺物出土狀況



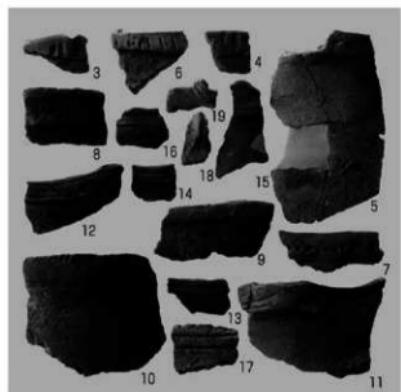
縄文時代溝状遺構完掘状況



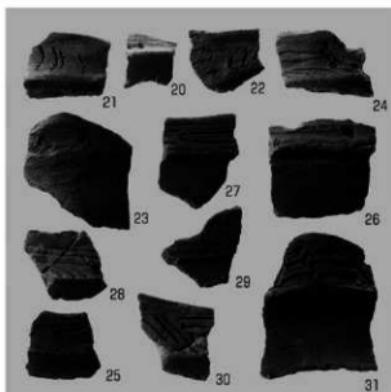
第VI層完掘状況



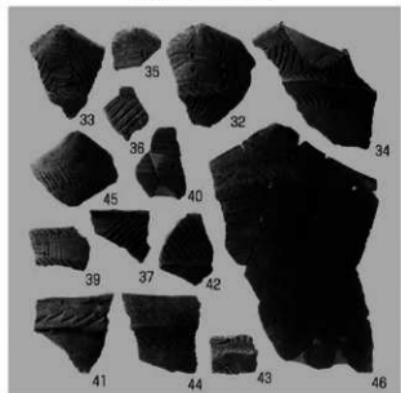
縄文時代竪穴状遺構完掘状況



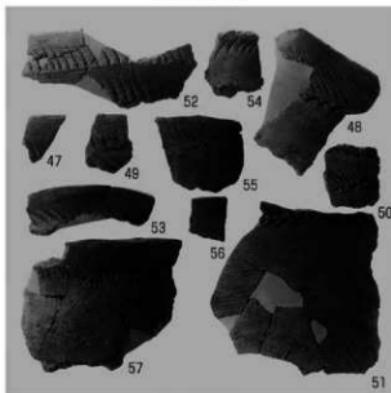
縄文土器 1類・2類



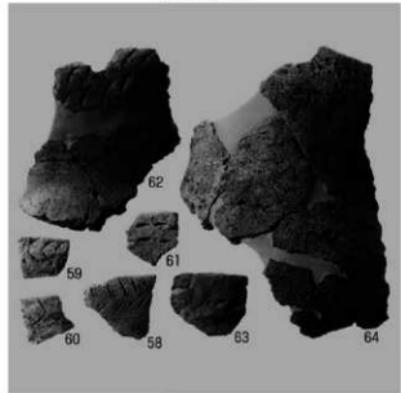
縄文土器 3類



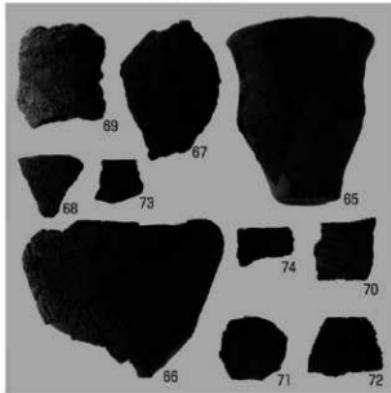
縄文土器 4類



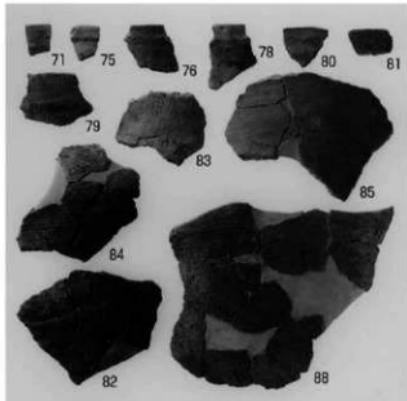
縄文土器 5類



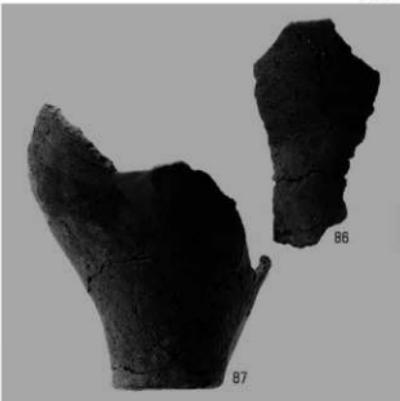
縄文土器 5類



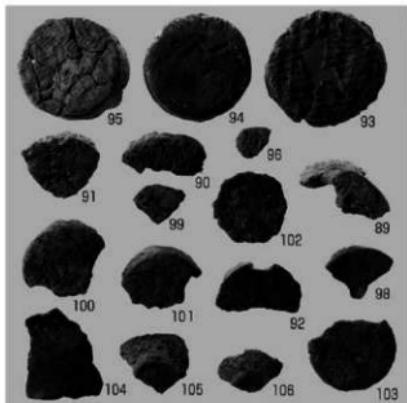
縄文土器 6類



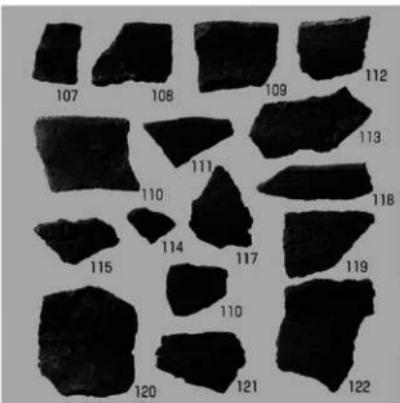
縄文土器 6類



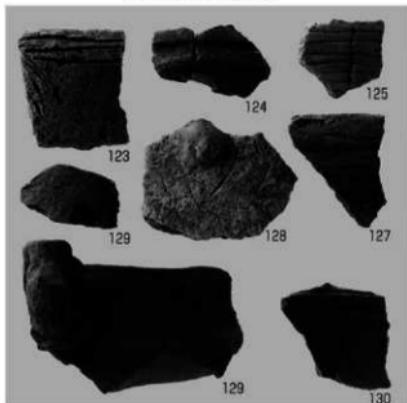
縄文土器 6類



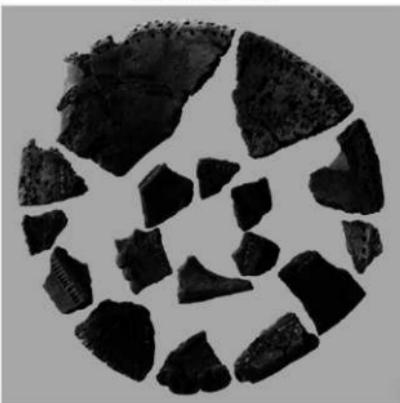
縄文土器 6類（底部）



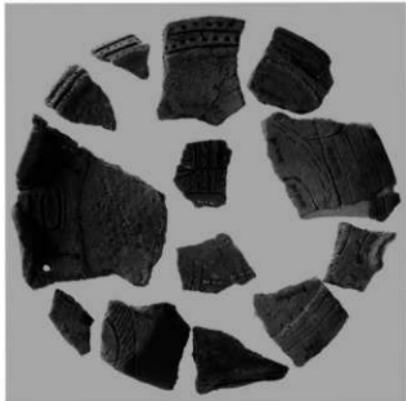
縄文土器 7類～9類



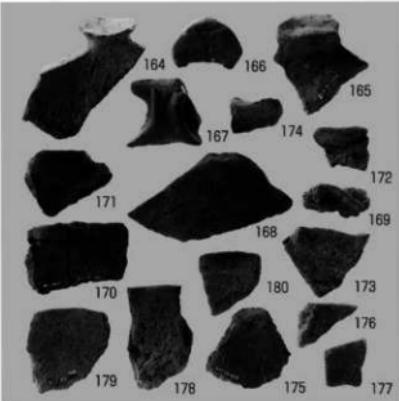
縄文土器 未分類



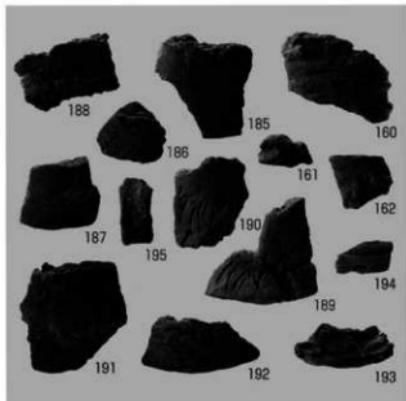
縄文土器 台付皿形土器（皿部）(131～147)



繩文土器 台付皿形土器(皿部) (145~159・163)



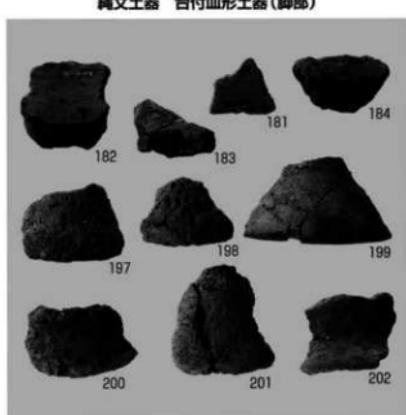
繩文土器 台付皿形土器(皿部)



繩文土器 台付皿形土器(脚部)



196



繩文土器 台付皿形土器(脚部)



196

